平成23年度研究紀要（第32集）

将来にわたって
豊かな生活を拓く児童生徒の育成

ー子どもの過去と未来をつなぐ授業実践ー

（３年計画の２年次）

群馬大学教育学部附属特別支援学校

ま え が き

本日は第３２回群馬大学教育学部特別支援学校公開研究会へご参会いただきまして，誠にありがとうございます。また、当研究に際しまして、ご支援ご協力をいただきました多くの皆様に、心よりの感謝を申しあげます。「将来にわたって豊かな生活を拓く児童生徒の育成－子どもの過去と未来をつなぐ授業実践－」の２年目として、成果をここに公開させていただきます。

当研究においては、本校において培ってきた「個別の教育的ニーズにもとづいた教育支援計画」の策定と実施、評価に際して、そのサイクルを過去、現在、未来につなぐことにより精査し、その仕組みを再構築することを考えております。このことによって、本人、保護者、教師の願いをもとに、現在並びに将来にわたって、本人が豊かに生活を拓いていく姿が実現されるよう願ってのものです。

本日は、授業の計画、実践、評価を通して明らかに成りつつあるその一端をお示しすることで、取り組みについてご理解いただき，次なる課題に向けてご批判ご指導をいただきたいと考えております。

また、研究への取り組みを公開させていただくにあたっては、その過程で年間に数回のワークショップ型公開授業研究会を行わせていただきました。その結果、本校の教員ひとり一人の研鑽を深めることができたことは勿論ですが、特別支援学校や一般の公立小中学校の先生方に平素からご参加をいただき、本校のテーマを共有して協議に参画していただくことができました。大きな成果の一つと考えております。

本日の公開研究会におきましても、同様の方法にて行ないますので、子どもの成長を願い、共に授業を創りよりよい実践を実現する立場から、熱心な協議がなされることを心から願っております。

校　長　　松本　富子

目　　次

まえがき･･･ 1

目次･･･ 2

Ⅰ 研究テーマ･･･ 4

Ⅱ 研究テーマ設定の背景･･･ 4
　1　これまでの研究の経緯･･ 4
　2　障害のある子どもを取り巻く社会情勢･･････････････････････････ 4
　3　特別支援教育の今日的な課題････････････････････････････････ 5
　4　１年次研究の成果と課題････････････････････････････････････ 5

Ⅲ 研究目的･･･ 6

Ⅳ 研究内容･･･ 7
　1　子どもの「過去」と「未来」をつなぐ授業実践を行う過程････････････ 7
　2　子どもの「過去」をよりよく生かすために･･････････････････････ 8
　3　子どもの「未来」につなぐために･･････････････････････････････ 8

Ⅴ 研究方法･･･ 8

Ⅵ 研究内容の基本的な考え方･････････････････････････････････････ 9
　1　子どもの「過去」を生かす授業の在り方･･････････････････････ 9
　(1)実態と学習履歴とのつながりをとらえる･･････････････････････ 9
　(2)学習履歴を活用して授業構想をする･･････････････････････････10
　2　子どもの「未来」につなぐ授業の在り方･･････････････････････10
　(1)個別の教育支援計画を参照した支援を行う････････････････････10
　(2)卒業生現状調査の結果を視点とし，授業の目標や支援の方法を見直す･･････12

Ⅶ 研究の実践 ･･･13
　1　学習履歴を生かし，子どもの現在の姿を見据えた授業実践
　　－共通テーマ「ボールであそぼう」(小学部) を例に－ ････････････････････14
　(1)学級担任が具体的に指導する内容を見出す････････････････････14
　　指導内容「協応動作」にかかるＪ君の学習履歴から読み取ったこと 14 ／
　　指導内容「協応動作」にかかるＪ君の実態 15 ／
　　Ｊ君にとっての指導内容「協応動作」 15 ／
　　Ｊ君の具体的に指導する内容 16 ／
　(2)授業者による共通テーマの設定････････････････････････････････16
　　学習集団の実態 16 ／
　　共通テーマにおける目標の設定 17 ／
　　学習履歴を生かした支援の方法の設定 17 ／

（3）授業の実際……………………………………………………19
J君を例とした，「ボールであそぼう」授業の実際 19 ／
まとめ・発達段階におけるＪ君の様子 23 ／
（4）まとめ……………………………………………………23

2　子ども一人一人の「３年後の願う姿」に向けた授業実践
－共通テーマ「沖縄に行こう」（中学部）を例に－ ……………25
（1）子どもの未来につなぐ授業づくり…………………………25
実態と学習履歴とのつながりをとらえる 25 ／
「３年後の願う姿」に向けた，具体的に指導する内容を見出す 26 ／
共通テーマの設定 28 ／ 共通テーマにおける目標の設定 28 ／
共通テーマ「沖縄に行こう」の指導計画 29 ／
学習履歴を参考にした支援の方法の設定 30 ／
（2）授業の実際……………………………………………………31
「３年後の願う姿」につなぐことを視点にした授業 31 ／
授業で高めた力を発揮する姿 33 ／
（3）子どもへの今後の支援に関する保護者との連携………………33
「日々の学習の記録」を使った保護者とのやり取り 33 ／
面談における今後の支援の方針についての検討 34 ／
（4）まとめ……………………………………………………36

3　卒業後の生活につなぐ授業実践
－共通テーマ「これって…アリ？　ナシ？」（高等部）を例に－ …………37
（1）目標や支援を見直して，卒業後の生活につなぐ授業にする………………37
実態と学習履歴とのつながりをとらえる 37 ／
卒業後の生活を見通して，具体的に指導する内容を見出す 38 ／
共通テーマの設定 39 ／ 共通テーマにおける目標の設定 39 ／
共通テーマ「これって…アリ？　ナシ？」の指導計画 40 ／
学習履歴と「20のこと」を参考にした支援の方法の設定 41 ／
（2）授業の実際……………………………………………………42
（3）本実践の成果……………………………………………………45
（4）まとめ……………………………………………………45

Ⅷ 研究のまとめ ……………………………………………46

引用・参考文献 ……………………………………………47

巻末資料 ……………………………………………48

あとがき ……………………………………………55

研究に携わった者 ……………………………………………56

Ⅰ　研究テーマ

将来にわたって豊かな生活を拓く児童生徒の育成
－子どもの過去と未来をつなぐ授業実践－
（３年計画の２年次）

Ⅱ　研究テーマ設定の背景

１　これまでの研究の経緯

本校では，平成13～19年度に，子ども一人一人の教育的ニーズを把握し，個別カリキュラムを編成・実施するための方法と手順についての研究に取り組んだ。

平成20・21年度には，個別カリキュラムによる授業を充実させたいと考え，子ども一人一人の教育的ニーズにこたえる授業づくりについての研究に取り組み，子どもが主体的に活動し，考えて「できる」ようになる授業を追求してきた。

平成22年度からは，子どものこれまでの学びやこれからの育ちに着目しながら，子ども一人一人の教育的ニーズに合わせて，目標や学習活動，支援の方法を設定していく授業づくりについて，実践研究に取り組んでいる。

２　障害のある子どもを取り巻く社会情勢

平成18年の国連総会で採択した「障害者の権利条約」は，障害者の人権及び基本的自由の完全かつ平等な享有を促進し，保護し，確保することを目的としている。この条約について，我が国では，平成19年に署名し，現在，批准に向けた動きを活発化させている。

その一つが，障害者基本法の一部改正である。それは,「全ての国民が，障害の有無にかかわらず，基本的人権を生まれながらに持っていて尊重されるものである」という理念の浸透と,「相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現」を目的としている。この目的を達成するための原則として,「地域社会における共生」や「意思疎通手段選択の機会の確保等」，そして合理的配慮による「社会的障壁の除去」が規定されている。教育については,「可能な限り共に教育を受けられるように配慮すること」や「本人の意向を尊重しつつ年齢や能力,特性に応じた十分な教育を受けられるようにしなければならないこと」，加えて「環境の整備（調査・研究，人材の確保・資質の向上，適切な教材等の提供，学校施設の整備等）を促進する」旨も規定されている。

障害のある子どもにとっては，自分の暮らす地域社会において，より主体的に社会生活を送ることができるようになるための施策が進められている段階であると言える。

３　特別支援教育の今日的な課題

特別支援学校の新学習指導要領は，小学部については平成23年度から，中学部については平成24年度から全面実施することとし，高等部については平成25年度から学年進行により段階的に実施することとしている。改訂の基本方針では，「社会の変化や幼児児童生徒の障害の重度・重複化，多様化などに対応し，障害のある子ども一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育や必要な支援を充実させる」と述べ，改善の観点として，「障害の重度・重複化への対応」，「一人一人に応じた指導の充実」，「自立と社会参加に向けた職業教育の充実」，「交流及び共同教育の推進」をあげている。

このように，子どもの未来の姿を見通し，一人一人の教育的ニーズに応じた指導を行うことが求められている。自立や社会参加に向けて，自分の持っている力を生かし，主体的に課題解決に取り組もうとする子どもを育成していくことが必要であるととらえている。

４　１年次の研究成果と課題

１年次，本校では，将来にわたって豊かな生活を拓く児童生徒を育成するために，過去の学びの積み上げやつながりの上に現在の姿をとらえ，その子どもの未来の姿を見通した指導を行っていくことが必要であると考えた。そこで，目指す授業を，子どもの過去と未来を確実につなぐ授業ととらえた（**図１**）。

子どもの過去の学びの積み上げやつながりを，学習履歴[1)]からとらえることを試み，「学習履歴活用の手順」を明らかにした。子どもの未来の姿については，個別の教育支援計画[2)]の「３年後の願う姿」を参照することとし，共通テーマ[3)]における目標設定を行うことができた。また，障害のある子どもの自立や社会参加に必要な力について調査をとおして明らかにしたいと考え，本校卒業生への現状調査を行った。そこから得られたことを基に「働くことを観点とした個別カリキュラム実施上の配慮（H22暫定案）」をまとめた。

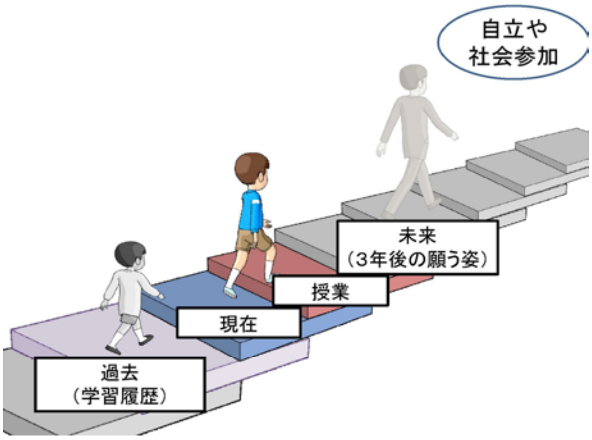


図１　過去と未来をつなぐ授業のとらえを表したイメージ図

これらのことを授業づくりに生かすことで，本校では，１年次の研究の成果として，次のようなことができたと実感している。

○学習履歴を基に，「高める」，「広げる」，「定着を図る」の観点をもって指導内容を取り扱ったり，学習活動や支援の方法を設定したりすることができた。
○個別の教育支援計画に示した「３年後の願う姿」を参照して，共通テーマにおける目標を設定することができた。
○働くことに視点を当て，卒業生現状調査から明らかにしたことを，学習活動の設定に生かすことができた。

一方では，研究や実践を振り返ったときに，次のような課題があると受け止めている。

○学習履歴をどのようにとらえることで，子どものこれまでの学びを生かしたよりよい授業を行うことができるのか，さらに探っていく必要があること。
○個別の教育支援計画に示した「３年後の願う姿」を参照した授業づくりの方法をより具体的なものにし，保護者と連携した支援の在り方を探っていく必要があること。
○働くこと以外にも視点を当て，卒業後の生活につなぐ授業をより確かなものにしていく必要があること。

２年次は，これらの課題の解決を目指すことで，昨年度見出した「子どもの過去と未来をつなぐ授業の在り方」の基本的な考え方をより確かなものとすることができると考える。

以上のようなことから，昨年度に引き続き，「将来にわたって豊かな生活を拓く児童生徒の育成 －子どもの過去と未来をつなぐ授業実践－」をテーマに掲げ，自立や社会参加につなぐ授業を追求することにした。

Ⅱ 註 １）通知票や学習記録として残した個々の子どもの学習の記録をまとめたもの。指導時期，目標，取り扱った指導内容，学習の様子，評価（できるようになったこと，できるようになりつつあること）がわかる。

２）本校では「移行支援プラン」，「特別支援プラン」，「特別支援プログラム」，「個別移行支援計画」の４つの計画を一冊のファイルに綴じ込み，「個別の教育支援計画」と呼んでいる。本稿では，４つの計画の役割や関係を踏まえた上で，一般的に用いる名称となるよう，「本稿での呼び方」のように言い換えている（図２）。

計画の名称	役割	本稿での呼び方
①移行支援プラン	個別カリキュラムを編成する際に，3年程度の方向性を示す計画。	個別の教育支援計画
②特別支援プラン	5つの年間目標と10の短期目標に基づく指導計画。指導要録，通知票として活用する。	個別の指導計画
③特別支援プログラム	特別支援プランを具体化した計画。指導内容の組織と授業時数の配当を示す。	
④個別移行支援計画	卒業後の生活を予想し，そのために必要となる支援についての計画。	個別移行支援計画

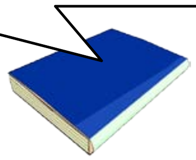


図２　本校の個別の教育支援計画

３）子ども一人一人の指導内容を取り扱いながら，学習集団としては同じ活動に取り組むことができるように組み立てた単元の授業。

Ⅲ　研究目的

子どもの学習履歴を踏まえるとともに，未来を見通した授業実践をとおして，自立や社会参加につなぐ授業の在り方について明らかにする。

Ⅳ　研究内容

１　子どもの「過去」と「未来」をつなぐ授業実践を行う過程

本校では，過去と未来をつなぐ授業実践を行う過程を以下のようにとらえている。

学級・ホームルーム担任は，個別の指導計画に示された指導内容について，子どもの実態と学習履歴から，「高める」，「広げる」，「定着を図る」のどの観点で取り扱うか，指導の方針を決め，指導内容のとらえを明らかにする。個別の教育支援計画を参照し，「３年後の願う姿」へ向かうように，具体的に指導する内容を見出す。これらの情報を授業づくりカードに整理し，授業者に伝える（**図３−１の①②の部分**）。

授業者は，授業づくりカードの情報と学習集団の子どもの学習履歴を基に，授業を構想する。共通テーマにおける目標を設定する際には，個別の教育支援計画を参照し，子どもが「３年後の願う姿」に向かうようにする。学習履歴から読み取った，有効だった支援の方法を生かし，授業を行う（**図３−１の③④の部分**）。

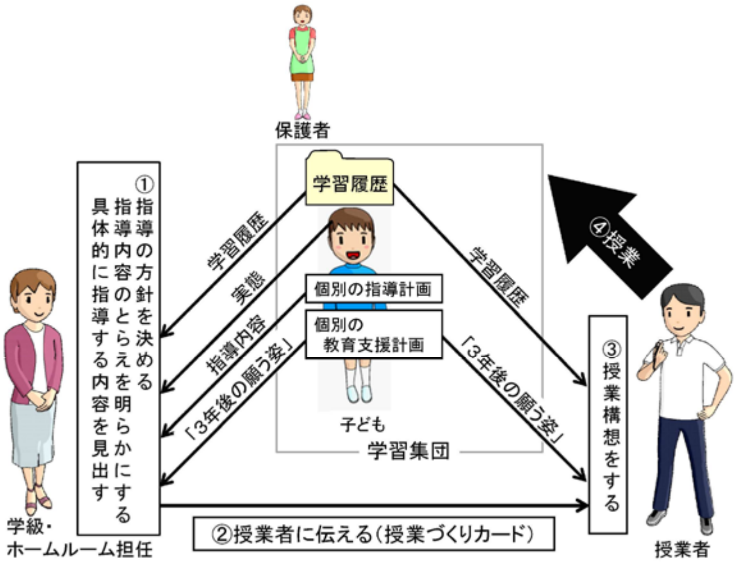


図３−１　過去と未来をつなぐ授業実践を行う過程（授業の実施まで）

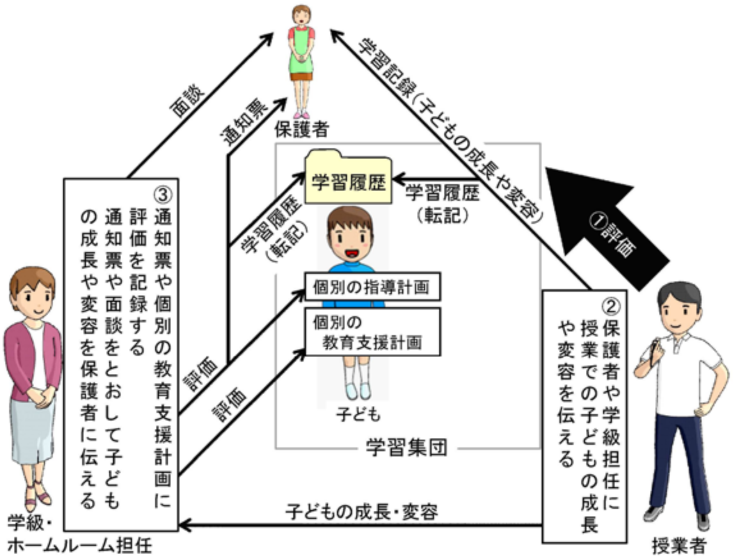


図３−２　過去と未来をつなぐ授業実践を行う過程（授業後）

授業者は，授業後に評価を行い，子どもの成長や変容について，学習記録を作成し，学級・ホームルーム担任や保護者に伝える（**図３−２の①②の部分**）。学級担任は，個別の教育支援計画に記録を残すとともに，通知票や面談をとおして本人や保護者に伝えていく（**図３−２の③の部分**）。通知票や学習記録は学習履歴に転記され，情報を蓄積していくことができる。

研究の２年次である今年度は，このような授業の基本的な考え方をより確かなものにしていくために，次のことに取り組んでいきたいと考えている。

２　子どもの「過去」をよりよく生かすために

学習履歴には子どもの様々な学習の記録を蓄積している。そこから，誰が，どの情報を取り出し，何を考えればよいのかを明らかにしておくことで，子どもの学びを生かした授業づくりが行いやすくなると考える。このようなことから，次のことに取り組む。

○「学習履歴活用の手順」をより明確なものにする。

３　子どもの「未来」につなぐために

子どもを「３年後の願う姿」に向けるためには，できるようになったことを記録に残し，残された課題について，保護者や本人と理解の共通化を図ることが必要である。本校では，個別の教育支援計画がその計画にあたる。そこで，次の内容について明らかにする。

○個別の教育支援計画を参照した支援の在り方について明らかにする。

子どもが向かう「未来」には，社会での生活が待っている。卒業後の生活で求められる力について明らかにし，それを確実に身に付けることができる授業を行っていきたいと考える。このようなことから，次のことを明らかにする。

○卒業後の生活につなぐ授業の在り方について明らかにする。

Ｖ　研究方法

○本研究にかかる基本的な考え方について，文献研究や調査研究，授業実践をとおして明らかにし，教員研究会議での討議を行って理解の共通化を図る。
○基本的な考え方に基づいた授業実践を行い，授業研究会をとおして検討を行う。
○授業実践から明らかにした考え方や具体的な方法を整理し，基本的な考え方をまとめる。

表１　「２年次の研究計画」

月	研究手順	具体的な取組
1	○１年次研究のまとめ	○１年次研究の振り返り，文献研究などの基礎研究
2	○授業実践にかかる問題の発見	○学習履歴一覧の試作，発見した問題の報告と協議
3	○問題の焦点化，課題の設定	○研究授業実施，本校の授業づくりの課題の焦点化
4	○研究内容の基本的な考え方の提案	○研究内容の基本的な考え方の理解の共通化
5	○研究の実践化，検証	○小中高の各部での授業実践，評価
6	○　〃	○　〃
7	○研究内容の基本的な考え方の確立	○研究内容の基本的な考え方の更新
8	○研究の中間評価	○研究紀要の執筆
9	○授業実践，検証	○小中高の各部での授業実践，評価
10	○　〃	○　〃
11	○公開研究会の開催	○研究内容の基本的な考え方・授業の公開，評価
12	○授業実践にかかる問題の焦点化	○授業実践の継続，評価
1	○２年次研究のまとめ	○２年次研究の振り返り，文献研究などの基礎研究
2	○授業実践にかかる問題の発見，焦点化	○研究にかかる書式の改訂，発見した問題の報告と協議
3	○３年次研究の課題の設定	○研究授業実施，本校の授業づくりの課題の焦点化

Ⅵ　研究内容の基本的な考え方

１　子どもの「過去」を生かす授業の在り方

（１）実態と学習履歴とのつながりをとらえる

本校では，単なる繰り返しの指導を行うことがないようにするために，「高める（考え方が高まったり，やり方が上達したりする)」，「広げる（身に付けた考え方ややり方を生かす場面・対象を増やす)」，「定着を図る（身に付けた考え方ややり方を生かす頻度を増やす)」の観点を決め，子どもの指導内容を取り扱うことにしている。このときに，学習履歴を活用することで，指導内容を取り扱う観点を決める手がかりにすることができる。学級・ホームルーム担任は，実態と学習履歴のつながりを考え，**図４**の授業づくりカードを用い，子どもの指導内容について思考を整理していく。

始めに，今までどのような学習に取り組んできたのか，学習の中での指導内容の獲得状況はどうであったのか，指導内容にかかる学習履歴を調べる（**図４の①の部分**)。次に，子どもの実態に目を向け（**図４の②の部分**)，子どもが現在抱えている課題が，学習履歴とどのようにつながっているのか考え，取り扱う観点を決めていく。例えば，以前に学習したことが，日常生活で生かされていないことに起因する課題であれば，「定着を図る」の観点をもって，もう一度同じ学習から始めることができる。以前に学習したことを日常生活で生かし，さらに高次の課題を抱えているとすれば，「高める」の観点をもって，さらにやり方や考え方を高めていく指導の方針を立てることもできる。また，相手や場面が変わっても同じことができるようになっていくことが課題であるとすれば，「広げる」の観点をもって，指導の方針を立てることができる（**図４の③の部分**)。

氏名	Ａ君
中長期的な目標	予定していることやことや経験したことを，単語を組 み合わせて話すことができる。
短期的な目標	自分がしたいことや経験したことを具体的に話して，相手に伝えることができる。
指導内容	報告の仕方
指導内容にかかる学習履歴 ①	・友だちに皿を手渡しながら，「たこやき，できました」と話すことができた。 ・「どのシャツがかっこいいですか」と尋ねられると，気に入ったシャツを指差して，「かっこいいです」と話すことができた。
指導内容にかかる実態 ②	・帰りの会で，スケジュール表のイラストを指さして，「たいこ，がんばりました」のように話すことができつつある。 ・「プール，はいった」のように，いつも経験していることについては，自信をもって話すことができる。 ・相手に対して伝えたい思いは強いが，語彙が多くないために伝わらず，あきらめてしまうことがある。
指導内容のとらえ （取り扱う観点） ③	・「いつ」「誰と」，「どこで」，「何を」，「どうした」のうちの３つについて，言葉や写真カード，絵カードを使って伝えること。 （高める）

図４　　授業づくりカード

このように，子どもの日常の様子をよく知る学級・ホームルーム担任であるからこそ，実態と学習履歴を結びつけて指導内容を取り扱う観点を決め，指導の方針を立てることができる。そして，指導内容がその子どもにとってどのようなことを意味するのか，子どもが何を学習する必要があるのかを具体的に考え，指導内容のとらえを明らかにすることができる。学級・ホームルーム担任は授業づくりカードを授業者に渡し，授業づくりに必要な子どもの情報を伝えていく。

（２）学習履歴を活用して授業構想をする

授業者は，授業づくりカードの情報を基に学習集団の子どもたちの個々の指導内容を取り扱うことが可能な学習活動を考える。その際，学習履歴を活用することで，子どもたちの経験を学習活動の設定に生かすことができる。例えば，子どもたちに馴染みのあることを基に学習活動を設定することで，子どもたちはこれまでの経験を生かして活動に参加することができる。反対に，不足している経験を明らかにして，意図的に活動を取り入れることで，経験の幅を広げることも可能である。

単元の導入段階では，学習履歴にある支援の方法や教師のかかわり方を参考にすることもできる。学習が進んでいくにあたっては，授業者が授業中の子どもの姿をとらえ，その姿に合った支援や教師のかかわり方を見つけていくことが重要である。その際には，授業者が新たに見つけた支援や教師のかかわり方の工夫を学習履歴に残していくことにより，学級担任や次の授業者に引き継いでいくことができると考える。

２　子どもの「未来」につなぐ授業の在り方

（１）個別の教育支援計画を参照した支援を行う

本校では，子どもの未来の姿を個別の教育支援計画の策定時に予想している。具体的には，小学部１年・４年，中学部１年，高等部１年の終了時に，その先のおよそ３年後を予想し，子どもの「３年後の願う姿」として設定する。この「３年後の願う姿」は，本人や保護者の願いをもとに，実態や生活環境，家庭の事情などを踏まえ，本人・保護者・教師が相談して設定する。個別の教育支援計画は，子どもが未来に向かう道筋を示す計画であると言える。

本校では，これまでも個別の指導計画と個別の教育支援計画を関連させることで，子どもが未来に向かって進むべき道筋を示してきた。今回は，それをよりよく行うことができるように，個別の教育支援計画の書式を改訂した（**図５，p.11**）。

改訂にあたっては，「３年後の願う姿」の基となる本人や保護者の願いを記載した。また，「３年後の願う姿」に向けた課題を明確にすることができるように，「３年後の願う姿」を実現するための課題を分析し，「実現に必要な力」として記載できるようにした。また，同じ課題に向かって，本人・保護者・教師が連携して取り組んでいくことができるように，三つの「３年後の願う姿」それぞれに「家庭及び外部連携」の欄を設けた。

授業づくりの際には，学級・ホームルーム担任は，子どもの学習履歴と実態からとらえた指導内容が，「３年後の願う姿」の「実現に必要な力」につながっているかどうかを，個別の教育支援計画を参照し，確かめる。そうすることで，現在取り組もうとしていることが，「３年後の願う姿」に向かう道筋の中で，どのような意味を持つのかを知ることができる。授業づくりカードに「３年後の願う姿」を記載することで，学級・ホームルーム担任と授業者が理解の共通化を図ることができる。

個別の教育支援計画

群馬大学教育学部附属特別支援学校
作成日：平成23年3月31日

フェイスシート					
ふりがな		性別	生年月日	ふりがな	
氏名			平成　年　月　日	保護者名	
住所				電話連絡先	
診断名	（診断医・診断機関		期日　平成　年　）		

支援シート			
身体障害者手帳の有無	有（　級）・無	療育手帳の有無	有（A1・2・3　B1・2）・無
学部学年　担任	小学部1年	小学部2年	
	小学部4年	小学部5年	
	中学部1年	中学部2年	
	高等部1年	高等部2年	
現在・将来についての希望（平成　年　月現在）			
本人			
保護者			
「3年後の願う姿」とその実現に向けた取組			
3年後の願う姿①（基本的生活習慣について）	○		
実現に必要な力〈授業で取り扱った時期〉	・		〈　〉
	・		〈　〉
	・		〈　〉
家庭及び外部連携			（　）
成果と課題	H22年度・		（　）
	H23年度・		（　）
	H24年度・		（　）
3年後の願う姿②（就労について）	○		
実現に必要な力〈授業で取り扱った時期〉	・		〈　〉
	・		〈　〉
	・		〈　〉
家庭及び外部連携			（　）
成果と課題	H22年度・		（　）
	H23年度・		（　）
	H24年度・		（　）
3年後の願う姿③（余暇・地域生活について）	○		
実現に必要な力〈授業で取り扱った時期〉	・		〈　〉
	・		〈　〉
	・		〈　〉
家庭及び外部連携			（　）
成果と課題	H22年度・		（　）
	H23年度・		（　）
	H24年度・		（　）
策定日　平成　年　月　日〔新規・更新（　）回〕			
上記の内容及びその活用について，同意します。　平成　年　月　日　本人の署名（代筆可）		保護者署名	

＊面談をとおして聞き取った本人や保護者の将来の希望を記入する。

＊本人・保護者との面談で話し合ったことや，日常の学校や家庭での様子，生活環境等を総合し，①基本的生活習慣について，②就労について，③余暇・地域生活について，の3つの観点から「3年後の願う姿」を設定する。

＊「3年後の願う姿」を実現するために必要となることを分析し，3つ程度記述する。授業で取り扱った場合には，＜　＞内に指導時期を記入する。授業の詳細については，指導時期を基に学習履歴一覧を参照することで，内容を知ることができる。

＊家庭や外部機関等で，「実現に必要な力」に向けて取り組んでいることを記述する。

＊「３年後の願う姿」に向けた子どもの成長や変容を記述する。

＊：記入上の観点

図５　個別の教育支援計画

授業後には，学級・ホームルーム担任は，子どもが授業で取り組んだことを個別の教育支援計画に記録していく。本人・保護者・教師が，個別の教育支援計画を用いた話し合いを行うことで，これまでにどのような力を付けることができているのか,「３年後の願う姿」に向けて残している課題はどのようなことなのか，理解の共通化を図り，家庭と学校が共通の支援を行うことができる。進級に伴い学級・ホームルーム担任が替わっても，個別の教育支援計画を引き継ぐことで「３年後の願う姿」を見通した支援を継続することができると考える。

（２）卒業生現状調査の結果を視点とし，授業の目標や支援の方法を見直す

働くことに加え，余暇活動や日常生活の充実，健康管理について，卒業生の現状を明らかにし，子どもの卒業後の生活を見通した授業づくりに生かしていきたいと考え，平成23年度卒業生現状調査を行うこととした。過去５年間の卒業生の進路先の事業所を対象に，卒業生20名について，卒業生が事業所に進んだ当初から現在に至るまでに抱えてきた生活上の課題について，聞き取り調査を行った。項目は，「Ⅰ　通勤に関して」，「Ⅱ　作業に取り組む場面に関して」，「Ⅲ　休憩時間に関して」，「Ⅳ　余暇に関して」，「Ⅴ　食事に関して」，「Ⅵ　その他の基本的生活習慣に関して」の６つとした。

調査の概要と分析結果は，巻末資料（pp.48-54）のとおりである。

子どもの卒業後の生活を，「家庭で過ごす場面」，「地域で暮らす場面」，「職場で働く場面」の３つの場面としてとらえ，分析結果から得られた情報を振り分けた。そして「子どもの将来を見通して，大切にしたい20のこと」（**表２**）としてまとめた。

表２　「子どもの将来を見通して，大切にしたい20のこと」

家庭で過ごす場面	○身辺の処理と健康管理を確実に行うこと。 ○生活リズムを整えること。 ○持ち物の管理や身の回りの整理をすること。 ○自分の気持ちや健康状態を把握し，他者に伝えること。 ○相手に好感を与える態度や身だしなみを心がけること。 ○状況を判断して，安全に行動すること。 ○バランスを考えながら食事をしたり，調理をしたりすること。 ○金銭の管理や支払いをすること。
地域で暮らす場面	○気持ちが落ち着く場所や自分なりの楽しみをもつこと。 ○趣味・特技をもち，楽しみながら視野を広げること。 ○いろいろな人と活動したり，いろいろなことに挑戦したりすること。 ○自分の住む地域に関心を持ち，関わりのある地域へ活動の場を広げること。 ○物を大切にすること。
職場で働く場面	○一人で作業を進めること。 ○仲間と協力して作業をすること。 ○報告・連絡・相談をすること。 ○指示に合わせて取り組むこと。 ○始まりや終わりが分かること。 ○長時間，安定したペースで作業を続けること。 ○自分なりの目標をもち，意欲的に作業に取り組むこと。

「子どもの将来を見通して，大切にしたい20のこと」を卒業後に求められることとして示しておくことで，私たちが日常行っている授業の目標や支援の方法が，子どもの卒業後の生活につながるものになっているか，確認するための視点とすることができる。また，「子どもの将来を見通して，大切にしたい20のこと」をとおして，卒業後の子どもの姿を具体的に想像することで，卒業後の生活に向けて今から取り組んでおくべきことを明らかにすることができる。

「子どもの将来を見通して，大切にしたい20のこと」に照らすことで，私たちが行ってきた子どもの将来の生活を見通した取組をより具体化していくことができるのではないかと考えている。

Ⅶ　研究の実践

「Ⅳ　研究内容」（pp.7-8）で示したとおり，研究内容は次の３つである。

○「学習履歴活用の手順」をより明確なものにする。 ○個別の教育支援計画を参照した支援の在り方について明らかにする。 ○卒業後の生活につなぐ授業の在り方について明らかにする。

小中高の各部には，それぞれ次のような授業実践の課題があるととらえている。

小学部は，学習を確実に積み上げていくことを大切にする段階である。学習履歴と実態から子ども一人一人の指導内容をよりよくとらえ，子どもに合った学習活動や支援の方法を設定・工夫する必要がある。

中学部は，小学部と高等部をつなぐ移行段階である。小学部で積み上げた学習を生かしつつ，未来を見通して，卒業後の生活につながる力が少しずつ身に付いていくように子どもの成長を見守っていく必要がある。

高等部は，卒業を目前に控えている。卒業後の生活に必要な力を身に付けることができているか，確認しながら進めていく必要がある。

このような課題を踏まえて，３年計画の２年次の研究では，小中高の各部を研究組織として，特に重視する内容を以下のように分担し，本研究における授業づくりの基本的な考え方をより確かなものにしていくことにした。

〈小学部〉

○「学習履歴活用の手順」をより明確なものにする。

〈中学部〉

○個別の教育支援計画を参照した支援の在り方について明らかにする。

〈高等部〉

○卒業後の生活につなぐ授業の在り方について明らかにする。

次に，それぞれの実践について紹介する。

（文責：石井）

１　学習履歴を生かし，子どもの現在の姿を見据えた授業実践
－共通テーマ「ボールであそぼう」（小学部）を例に－

小学部では，学習履歴を生かし現在の姿を見据えることで，指導内容を取り扱う観点を決めたり，学習活動の目標や支援の方法を設定したりすることができると考えた。ここでは，共通テーマ「ボールであそぼう」（指導期間：6月1日～6月27日，全15回）の実践をとおして，学習履歴活用の手順と現在の子どもの姿を見据えた授業実践を紹介する。

（１）学級担任が具体的に指導する内容を見出す

今回の実践では，児童８名（１年生１名，２年生１名，３年生１名，４年生１名，５年生２名，６年生２名）を学習集団として編成した。このうち，取り扱う指導内容が「協応動作」である４年生のＪ君を研究対象児童とした。

以下，Ｊ君を例に，学級担任が指導内容をとらえ，具体的に指導する内容を見出すまでの手順を説明していく。

①指導内容「協応動作」にかかるＪ君の学習履歴から読み取ったこと

Ｊ君の指導内容「協応動作」から具体的に指導する内容を見出すために，学級担任は，必要な情報を授業づくりカードに記入して思考の流れを整理した（**図６**, p. 15)。

はじめにＪ君の指導内容「協応動作」について，過去２年間の学習履歴を調べた。平成21年度および平成22年度の学習では，**表３**のような記述が見られた。

表３　「Ｊ君の『協応動作』の学習履歴」（抜粋）

年度	学期	中長期的な目標	短期的な目標	指導内容	共通テーマ	学習の様子・評価
22	前期	腕や脚を十分に曲げ伸ばして，体操をすることができる。	高ばいの姿勢で雑巾がけを行うことができる。	協応動作	「まとにあてよう」	手と足を順番に動かすことをねらいに，的当てをしました。教師がＪ君の立ち位置から一歩前の床に印を付け，「印を踏もう」と言葉をかけ，一歩踏み出して投げる手本を示しました。すると，一歩前に踏み出せば遠くまで投げられることに気づき，左足を一歩前に出して投げる姿が見られるようになりました。
22	後期		体の動かし方の手本を見て肩，膝の関節を大きく動かすことができる。	協応動作	「たすきをつなごう」	同じチームの友だちの動きに合わせてたすきを手渡すことをねらいに，駅伝をしました。はじめのうちは，たすきを手渡す際，友だちが動いてしまい，なかなか手渡せないことがありました。そこで教師が，たすきを渡す際のたすきの持ち方の手本を示しました。Ｊ君は，友だちに手渡す際に，たすきの端と端を持って大きく広げ，友だちが握りやすいようにして，手渡すことができました。
21	前期	いろいろな素材に働きかけて物作りをすることができる。	タンブリンを音楽に合わせてたたくことができる。	協応動作	「いっしょにあそぼう」	１年生と一緒に乗り物を使って遊びました。三輪車に乗って遊ぶ際には，教師の「ようい，どん」の声に合わせて，友だちと競争して遊ぶことができました。折り返すときには，膝を曲げてハンドルを切りながら，重心を傾けることで曲がることができるようになりました。
21	前期		タンブリンを音楽に合わせてたたくことができる。	協応動作	「かこう，つくろう」	紙粘土で形をつくる学習をしました。いろいろな色の粘土を両手でこねながら混ぜ合わせて，大きな一つの塔を作ることができました。両方の手のひらで叩いたり，指先でつまんだりして，トゲトゲや平らな形に変えることもできるようになりました。
21	後期		粘土を20cm程度の長さに伸ばすことができる。	協応動作	「りょうてでたたもう」	帰りの着替えの時に，教師と一緒に「パタン」という言葉に合わせて，脱いだ衣服の折りたたみをしました。初めは「パタン」という言葉かけが必要でしたが，「１，２，３，４」と数の言葉がけに合わせて順番に服をたたむことができるようになりました。

Ｊ君は，平成21年度には，「りょうてでたたもう」の学習をとおして，一人で衣服をたたむことができるようになった。平成22年度には，「まとにあてよう」の学習をとおして，的を見てボールを当てようとする姿が見られた。また，「たすきをつなごう」の学習をとおして，友だちの手に渡しやすいように両手をたすきの端へと持ち直す姿が見られた。

②指導内容「協応動作」にかかるＪ君の実態

学級担任は，**表３**（p. 14）から読み取ったことを念頭におき，Ｊ君の日常生活での「協応動作」に目を向けた。着替えの際，ボタンを目で確認しながら一人ではめることができる。また，脱いだ際に裏返してしまったズボンの脚の部分に手を入れ，裾を指でつまんで直すこともできる。また，休み時間に体育館で遊ぶ際には３ｍ程離れた場所に教師が立ち，Ｊ君の胸元に向けてボールを投げると，両手でボールを捕ることができる。

このように，学習したことを確実に身に付け，目で対象をとらえて上肢を動かすことはできていることが多いととらえることができた。

一方で，長縄を使った運動では，20cm程の高さにピンと教師が張った縄を跳び越えることはできるが，縄がゆっくりと前後に揺れているときには，タイミングが合わず跳び越えることができない。また，キャッチボールの際，Ｊ君の２，３歩先に前に落ちるボールを投げるとＪ君は手を出して反応することはできるが踏み出した歩数とボールとの距離感が合わずに取ることができなかった。現在のＪ君にとっては，目で対象をとらえてタイミング良く下肢を動かすという学習課題があると言える。

③Ｊ君にとっての指導内容「協応動作」

学級担任は，学習履歴及び児童の実態から，対象を目でとらえて上肢を動かすことについては，十分にできていると考えた。そこで，今度は目でとらえた対象に合わせて動くために，下肢の動かし方を学習することが，Ｊ君にとって必要であると考えた。そこで指導内容「協応動作」について「高める」の観点を持って指導していくこととした。指導内容のとらえは，目で対象をとらえながら，左右に移動したり，前方へ踏み出したりすることとした。

指導内容のとらえと取り扱う観点が，「３年後の願う姿」につながっているかどうかＪ君の個別の教育支援計画を参照して確かめた。

氏名	Ｊ君
中長期的な目標	手や腕，足を協応させてボールを使った運動をすることができる。
短期的な目標	足を後方に引いてから，ボールを蹴り出すことができる。
指導内容	協応動作
指導内容にかかる学習履歴	・的をねらって５ｍ程離れた場所からボールを投げて当てることができた。 ・手元を見ながら衣服をたたむことができた。 ・たすきの端と端を持ち大きく広げて友だちに手渡すことができた。
指導内容にかかる実態	・約３ｍの距離から胸元に投げられたボールを捕ることができる。 ・２，３歩前に落ちるように投げられたボールに対しては，足を一歩踏み出して手を伸ばしている。 ・20cmほどの高さに張られた縄を跳び越すことができるが，前後に縄を揺らすと立ち止まってしまう。
指導内容のとらえ（取り扱う観点）	・目で対象をとらえながら，左右へ移動したり，前方へ踏み出したりすること。 （高める）
「３年後の願う姿」へのつながり	・進む方向を見ながら，ぞうきんがけをすることにつながる。
具体的に指導する内容	・動きながら目で対象をとらえること。

図６　Ｊ君の授業づくりカード

④Ｊ君の具体的に指導する内容

Ｊ君は，静止した対象を目でとらえてその場で体を動かしながら，対象を手に取って投げたり，足で蹴ったり，跳び越えたりすることはできる。一方で，Ｊ君自身が動いていると対象を見失うこともある。学級担任は，Ｊ君が動きの中で対象を目で見てとらえることが必要であるのではないかと考えた。そこで，具体的に指導する内容を左右に移動したり，前方へ踏み出したりする中で「動きながら目で対象をとらえること」とした。

（２）授業者による共通テーマの設定

授業者は，各学級担任から，児童の実態や学習履歴，具体的に指導する内容などを記述した授業づくりカードを受け取った。以下，Ｊ君を例に，授業者による共通テーマにおける目標の設定と支援の構想までの手順を説明していく。

①学習集団の実態

本授業は，小学部の時間割における，月～金，9：40～10：15の時間帯に相当し，「動きづくりや身体ほぐし，運動量の確保という点から行う学習の時間」を指導時間帯のねらいとしている。授業者は指導時間帯のねらいに基づき，共通テーマを設定していく。

本学習集団は中学年・高学年児童を中心とした集団である。遊びが中心であった低学年から，今後，運動へと動きづくりを発展させていくためには，運動遊びをとおして自発的に体を動かしたり，日常生活を支える基本的な動きを身につけたりしてほしいと考えた。授業者は，８人の児童がこれまでどのような遊びをとおして体の動きを学んできたのか学習活動を明らかにしようと考え，個々の児童の学習履歴を振り返ることとした。

小学校学習指導要領体育科の領域をもとにして，**表４**のように，過去２年間の８人の学習履歴を領域別に分けた。なお，５月に行った体力テストでの児童の実態を踏まえ，領域は低学年のものを用いた。

表４　「８人の児童の学習履歴の分類（H21.4月 ～ H23.5月）」

領域／児童（学年）	体つくり運動	器械・器具を使っての運動遊び	走・跳の運動遊び	水遊び	ゲーム	表現リズム遊び	雪遊び・スキー
Ｂ　君(１年)	－	－	2	－	－	－	－
Ｄ　君(２年)	－	5	3	1	－	2	1
Ｈ　君(３年)	4	6	8	2	－	2	2
Ｊ　君(４年)	4	5	6	2	1	3	2
Ｎさん(５年)	4	4	6	2	1	3	2
Ｏさん(５年)	4	6	6	2	1	2	2
Ｑ　君(６年)	4	5	8	2	－	2	2
Ｒ　君(６年)	4	5	6	2	1	3	2

※数字は，共通テーマで取り扱った回数

表４（p.16）から，８人の児童は，体つくり運動や走・跳の運動遊び，器械・器具を使っての運動遊びは，年１回以上は行ってきたことがわかった。しかし，ゲーム，表現リズム遊びの経験が，年１回もしくは０回と少ないこともわかった。

授業者は，８人の児童に今までの学習では経験が少ない領域のゲームを取り扱うことで，一人一人の児童にとって新たな動きを身につけることができると考えた。また，ゲームをとおして友だちと協力・競争したり，役割によって動きを変えたりすることも学習してほしいと考えた。馴染みの少ないゲームを学習活動として扱う際，児童に親しみのある用具を用いることで，児童の苦手意識を和らげることができると考えた。そこで授業者は，再度８人の児童の学習履歴を読み取ることにした。用具を用いた運動としては，サーキット運動やボール運動，なわとび運動の経験があることがわかった。中でも全員の児童が経験したものは，ボール運動であった。そこで，ボール運動を組み入れていくことに決めた。さらに，「投げること」は学習してきた児童も多いが，２人を除いて蹴ることを学習することがなかったということを学習履歴より読み取ることができた。ボール運動の中でも，「蹴ること」を中心とすることで，今までの「投げること」や「走ること」の学習とは異なった下肢の使い方や動かし方を学ぶことができると考えた。学習活動としては，ボールを使ったサーキット運動から始め，徐々にゲームであるキックベースボールへと移行していく。ボールを使い，運動遊びをとおして学習していくため，本共通テーマを「ボールであそぼう」とした。

②共通テーマにおける目標の設定

共通テーマにおける目標は一人一人に設定する。Ｊ君は，指導内容が「協応動作」であり，具体的に指導する内容は「動きながら目で対象をとらえること」であった。Ｊ君が，対象となるボールを目でとらえながら，サーキット運動とキックベースボールを行う姿が指導内容を獲得することととらえ，「助走をつけてボールを蹴っている」を共通テーマにおける目標として設定した。授業づくりカードにある具体的に指導する内容から，授業者は８人の児童それぞれに本共通テーマにおける目標を設定した。

③学習履歴を活用した支援の方法の設定

授業者は共通テーマ「ボールであそぼう」における個々の児童への支援の方法を探った。８人の児童それぞれに対する支援の方法の中から，Ｊ君の共通テーマにおける支援の方法を示す。Ｊ君の学習履歴より，有効であった支援の方法が読み取れる記述を調べた。

H22	「とおくになげよう」では，「本人の目の前で教師の手本」を示すことで「手本を見ながら投げる」ことができるようになった。
H22	「すべってあそぼう」では，「教師の指さし」によって線に注意を向けることで「コースの線を見ながら遊具を操作」できるようになった。

学習履歴の記述より「教師」,「手本を示す」,「指さし」という支援に関するキーワードを読み取った。Ｊ君の指導内容は「協応動作」であり，目と体の部位を協応させることに課題が残っていると言える。「手本を示す」ことが支援に関するキーワードとして出てきたが，より視覚情報を限定して示すことが重要であると授業者は考えた。そこで「実際に教師がＪ君の目の前でやってみせる」ことをＪ君への支援の方法とした。支援の方法を具体的にしていくと，「Ｊ君の目の前でやってみせる」際には，「ここですよ」と指さしをしながら見る場所を示すことや教具を１つだけ用意して手本を示すことで，「視覚情報を限定する」ことが考えられた。活動においてもＪ君が目で対象をとらえやすくするために，興味・関心の高い教具を設置することとした。各段階ごとのＪ君への支援の方法を**表５**に示す。

表５　「共通テーマ『ボールであそぼう』における指導計画とＪ君への支援の方法」

段階	導入	展開	まとめ・発展
テーマ	「まとあてゲームをしよう」	「まとあてサーキットをしよう」	「キックベースボールをしよう」
回数	５回	４回	６回
●全体の活動	●的に向かってボールを蹴る。	●３種類の「バイキンマン」の的に，サーキット形式でボールを蹴り当てる。	●２チームに分かれて，止まっているボールや転がってくるボールを蹴り，キックベースボールをする。
●Ｊ君の学習活動	●ボールを見ながら，的に向かって蹴る。	●ボールを見ながら，的に向かって強く蹴る。	●転がってくるボールを蹴る。
○支援の方法	○教師がＪ君の目の前にボールを置き，「１，２，３」と言葉をかけながら的に向けて蹴る手本を示す。	○ボールの中心を強く蹴ることができるように，ボールの中心の部分に「アンパンマン」のシールをはっておく。	○教師が「J君，いきますよ」と言葉をかけ，J君がボールを目で確認した後で，ボールをゆっくりと転がす。

（３）授業の実際

①Ｊ君を例とした，「ボールであそぼう」の授業の実際

「ボールであそぼう」　（６月８日　15回中の５回目）

Ｊ君の本時の目標　「止まったボールを的に向かって蹴ることができる」

Ｊ君の学習履歴を活用した支援の方法

教師がＪ君の目の前にボールを置き，「１，２，３」と言葉をかけながら的に向けて蹴る手本を示す。

授業におけるＪ君の姿

教師がＪ君の目の前にボールを置き，ボールを指さしながら「ボールを的に当てますよ」と伝えた。Ｊ君は，うなずいた。教師は「１回先生がやってみるから，見ていてくださいね」と伝えた。Ｊ君がボールを目でとらえたことを確認した後，教師は２歩下がり，「１，２，３」とかけ声に合わせて，ボールを的に向かって蹴った。Ｊ君はボールの動きを目でとらえ，ボールが的に当たって鈴の音が鳴り，的が大きく揺れた様子を「つよい」と言いながらうれしそうに見ていた。

教師が「やってみますか」と尋ねるとＪ君は「はい」と答えた。そこでＪ君の足元にボールを置き，Ｊ君と一緒に教師は２歩後ろへ下がった。次にＪ君の後ろに教師が立ち，Ｊ君の顔の横から腕を伸ばして指さしをしながら，「的に向けてボールを蹴りますよ」と伝えた。Ｊ君はうなずき，教師が「１，２，３」とかけ声をかけると，ボールを見ながらかけ声に合わせてボールを蹴ることができた。ボールが的に当たり，的が大きく揺れて鈴が鳴るとうれしそうな表情を見せた。

ボールを蹴って的に当てたＪ君

評価・検討

「教師がＪ君の目の前にボールを置き，『１，２，３』と言葉をかけながら的に向けて蹴る手本を示す」という，学習履歴から有効であると読み取った支援の方法を設定した。すると，Ｊ君は，ボールを見ながら，「１，２，３」のかけ声に合わせてボールを蹴ればボールが的に当たることがわかり，ボールを的に当てることができた。

「ボールであそぼう」　（６月14日　15回中の８回目）

Ｊ君の本時の目標　　「ボールを見ながら強く蹴ることができる」

６回目から，「展開」の段階の学習となった。「展開」の段階では，複数の的の中から自分で的を選び，ボールを当てて,サーキット形式で進んでいく学習活動を設定した。Ｊ君は，ボールを蹴って的に当てることがよくできるようになっていた。そこで,「ボールを強く蹴る」ことが，Ｊ君にとっての次の目標であると考え，８回目の授業の目標を「ボールを見ながら強く蹴ることができる」とした。

Ｊ君の学習履歴を活用した支援の方法

ボールを見ながら強く蹴ることができるように，ボールの中心の部分に「アンパンマン」のシールをはっておく。

授業におけるＪ君の姿

教師は，学習履歴を活用した支援の方法として，ボールの中心に「アンパンマン」のシールをはることを考えた。教師は，Ｊ君の目の前にボールを置き，「アンパンチで『バイキンマン』をたおしましょう」と言いながらボールの中心に「アンパンマン」のシールをはって見せた。その後，教師はＪ君の目の前にボールと的を置き，２歩後ろに下がって「１，２,『アーンパーンチ』」と言いながら助走をつけてボールを的に当てる手本を示した。Ｊ君は「アーンパーンチ」と一緒に声を出していた。次に，教師はＪ君にボールを渡した。Ｊ君は，足元にボールを置き，２歩後ろに下がって，「アーンパーンチ」と言いながらボールを蹴ることができた。しかし，ボールは見ているものの，シールを目でとらえることができず，ボールの下の部分を蹴った。蹴られたボールはふわりと浮いて，的に届かず止まった。Ｊ君は「あれ」と言ってボールを取りに行き，ボールをもう一度置き，的に向けて蹴った。Ｊ君は１度目と同じようにボールの下の部分を蹴った。Ｊ君はボールの下の部分をつま先に軽く当てるように蹴ったため，ボールはコロコロと転がりながら的に当たった。的に当たったことで，Ｊ君はうれしそうであった。サーキット形式で運動を続ける間，Ｊ君はボールの下の部分をつま先に軽く当てるように蹴って転がしながら，的に当てて進んでいった。

つま先を軽く当ててボールを蹴ろうとするＪ君

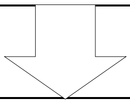
評価・検討

学習履歴を活用した支援の方法では，Ｊ君の現在の課題を解決することが難しくなっていると考えた。授業者は，Ｔ２，Ｔ３の３人で８回目の授業の様子をＶＴＲで確認することにした。

ボールの下部分をつま先で蹴るＪ君

学習履歴を活用した支援の方法では，「ボールの中心の部分に『アンパンマン』のシールをはっておく」とした。Ｊ君の実態として，ボールをしっかりと見ていたため，助走をつけてボールを蹴ることはできていた。しかし，Ｊ君はボールの中心を蹴ることはできなかった。そこで，Ｊ君が的に向かってボールを蹴る様子を横から撮影したＶＴＲを見ることにした。

ＶＴＲからも７回目までの成長の結果，Ｊ君はしっかりとボールを見て蹴ることができるようになっていた。しかし，しっかりとボールを見ようとするあまり，Ｊ君がボールに近づき過ぎて，上体が前のめりになっていることがわかった。Ｊ君がしっかりとボールを見ることができるようになったことで，上体が前のめりになってしまうという新たな問題が見られた。蹴り終わった後，Ｊ君は的に当たるまでボールを見続けている姿も見られた。上体を起こすことによって，足が高く上がり，強くボールを蹴ることができるのではないかと考えた。



次時への改善

Ｊ君が本時の目標を達成するには，ボールの中心を見ることができるようにするための支援ではなく，上体を起こしてボールを蹴ることができるようにするための支援を設定する必要があると考えた。Ｊ君はボールが的に当たるまでボールを見続けることができる。ボールを蹴った後すぐに的へと視線を移すことで顔が前方を向き，上体が起き上がるのではないかと考えた。そこで教具として，中心に大きな「バイキンマン」を据えたゴール型の的を用意した。的の後ろにセンサー付きのライトと呼び出しベルを設置した。ボールが的に当たった際には，「バイキンマン」の目が光り，「バイキンマン」の声が聞こえるようにすることで，Ｊ君の視線が自然に的へ移ることができるようになると考えた。

ゴール型の的

「ボールであそぼう」　（６月15日　15回中の９回目）

Ｊ君の本時の目標　「上体を起こして，ボールを強く蹴ることができる」

Ｊ君の学習履歴と前時までの成長を活用した支援の方法

上体を起こして蹴ることができるように，的を目線の高さに設置する。

授業におけるＪ君の姿

Ｊ君は，はじめのうち前時と同じようにボールをつま先に軽く当てるように蹴っていた。そのため，ボールは的に当たらず，「バイキンマン」の声も聞こえなかった。そこで，教師はＪ君の目の前で，ボールをすくい上げるように蹴る手本を示した。Ｊ君も教師と同じように，すくい上げて蹴る仕草をしていた。

６回目にＪ君は，ボールを下からすくい上げるように蹴った。ボールはふわりと浮き上がり，的の近くまで飛んだ。Ｊ君は，ボールを蹴った後，ボールの動きでなく，的を見るようになった。７回目には，蹴る動作を素早く行い，ボールがつま先に当たったすぐ後に，的へと視線を移していた。ボールを蹴った後，Ｊ君の視線が的へと移ったことで，顔が前方の的へ向き，上体が起き上がるようになった。８回目には，上体を素早く起こすように蹴ったことで，ボールは勢いよく浮き上がり，的に当たった。「バイキンマン」の「ハヒフヘホ」という声が聞こえ，Ｊ君は満足そうであった。その後もＪ君は的当てを続け，13回目には，上体を起こしながら，ボールに当たった足を素早く振り上げて，ボールを蹴ることができるようになった。的にボールが当たると「バン」という音が鳴るほど，強くボールを蹴ることができるようになった。

上体を起こしてボールを蹴るＪ君（左：蹴る前，右：蹴った後）

②まとめ・発展段階におけるＪ君の様子

右写真は，まとめ・発展段階においてキックベースボールを行った際のＪ君の様子である。

共通テーマ「ボールであそぼう」で，Ｊ君は「助走をつけてボールを蹴っている」ことを目標としていた。サーキット運動の学習をとおして，動きの中でボールを目でとらえて蹴ることができるようになった。キックベースボールの学習では，動いてくるボールを目でとらえ，助走をつけて蹴ることができるようになった。Ｊ君はサーキット運動で身につけた上体を起こして蹴ることが，キックベースボールの学習でもできていた。

上体を起こして転がってくるボールを蹴るＪ君

（４）まとめ

本実践をとおしてわかったことを基に，学習履歴活用の手順について，平成22年度本校小学部紀要の記述に修正を加え，**図７**のようにまとめた。

＜学級担任が，授業づくりカードに記入＞

①指導内容にかかる学習履歴を読み取る
②子どもの実態をとらえる
③子どもの実態と学習履歴のつながりを考え，指導内容を「高める」，「広げる」，「定着を図る」のどの観点で取り扱うかを決める
④指導内容のとらえを明らかにする
⑤具体的に指導する内容を見出す

⇩

＜授業者が，学習活動や支援の方法を設定＞

①学習集団の実態や個々の学習履歴を基に，個々の指導内容を取り扱うことができるような学習活動を設定する
②共通テーマにおける目標を設定する
③学習履歴を活用した支援の方法を設定する

⇩

＜授業者が，学習で見られた子どもの実態から支援の方法を改善＞

・学習における子どもの成長や変容と支援の方法を具体的に記述し，学習履歴として残していく
・学習における子どもの成長や変容をとらえ，次時の学習活動や支援の方法を改善する

図７　「学習履歴を活用した授業実践の手順」

指導計画の導入段階では，学習履歴から過去に有効であった支援の方法を見出して活用したところ，活動が異なっても有効であることがわかった。子どもが学習を積み重ね，できなかったことができるようになったり，できることがより確実にできるようになったりしたときには，そのときの子どもの姿から授業者が支援の方法を考える必要がある。このように，学習履歴から見出した支援の方法と共通テーマにおける成長や変容を活用した支援の方法を工夫することで，子どもが生き生きと学び，共通テーマにおける目標にせまることができるのではないかと考える。

今回の授業実践では，過去に学習したことが現在の生活に生かされているかを考えて指導の方針を立てた。また，過去の経験を生かしたり，経験を広げたりする視点を持って学習活動を設定することを試みた。子ども一人一人に合わせて，指導内容を取り扱ったり，学習活動や支援の方法を設定したりしていくためには，学習履歴の質を高め，量を増やしていくことが重要である。授業者は，有効でなかった支援も含めて，共通テーマにおける具体的な子どもの学びとともに学習履歴として残す。その上で，学習履歴を生かして，より現在の子どもの実態に合った支援の方法を見出していくことが今後の課題となるであろう。

（文責：山田）

２　子ども一人一人の「３年後の願う姿」に向けた授業実践
－共通テーマ「沖縄に行こう」（中学部）を例に－

中学部の共通テーマ「沖縄に行こう」（指導期間：５月９日～６月３日，全９回）では，学習履歴を活用しながら，子どもの「３年後の願う姿」に向けた授業実践を行った。その中で明らかにした，個別の教育支援計画を参照した支援の在り方や個別の教育支援計画を活用した保護者との連携について，記述する。

（１）子どもの未来につなぐ授業づくり

①実態と学習履歴とのつながりをとらえる

今回の授業は，中学部の時間帯における，火，木，10:20～11:50の時間帯に相当し，「衣食住に関する事柄を身につけること，生活上の課題を解決することを重視した学習の時間」を指導時間帯のねらいとしている。取り扱う指導内容が「質問の答え方」であるＮ君を研究対象生徒とした。指導内容「質問の答え方」にかかるＮ君の学習履歴は，**表６**のとおりであった。

表６　「『質問の答え方』にかかるＮ君の学習履歴」

「共通テーマ」（実施の年度/前後期）	Ｎ君が学習に取り組む様子
「朝の会をしよう」（平成22年度/後期）	教師の後に続いて，「○○，がんばります」と２語文で復唱するようにしたり，他の友だちが発表する姿を参考にできるようにＮ君の発表順を最後にしたりした。そうすることで，教師の「今日は，何の授業を頑張りますか」という質問に対し，「ボール，がんばります」と答え，その日の目標を２語文で発表する姿が徐々に見られるようになってきた。
「第２回就業体験」（平成21年度/後期）	教師が，ステープラー針の写真カードを示しながら，「針をください」と補充を依頼する手本を示すと，カードを相手に示しながら用件を伝える方法があることに気付き，教師の方を向いてカードを示す姿が見られるようになった。そこで，教師が「どうしましたか」と尋ねるようにしたところ，カードを示しながら，「ください」と伝えることができるようになってきた。

※傍点は，Ｎ君の「質問の答え方」にかかる具体的な姿としてとらえた部分。

Ｎ君は，表６（p.25）の学習履歴にあるような学習を積み重ねることで，２語文で答えたり，具体物や写真を示しながら答えたりする姿が徐々に見られるようになってきた。

②「３年後の願う姿」に向けた，具体的に指導する内容を見出す

Ｎ君について，具体的に指導する内容を見出すために，学級担任は，指導内容「質問の答え方」にかかる学習履歴（表６，p.25）と実態を考察した。その結果，３語文で用件を伝えたり，言葉にしたりすることは，現状では難しいと判断した。現段階では，写真やイラストを使いながら，相手に用件を伝える力を更に高めることが求められると考えた。そこで，指導内容のとらえを「単語をつなげて詳しく答えること」や「写真やイラストを示しながら答えること」とし，指導内容を「高める（考え方が高まったり，やり方が上達したりする）」という観点で取り扱おうと考えた。次に，指導内容のとらえと取り扱う観点がＮ君の「３年後の願う姿」に向かっているのかどうか，Ｎ君の個別の教育支援計画（図８，p.27）を参照して，確かめることにした。

Ｎ君の個別の教育支援計画（図８，p.27）の「３年後の願う姿②」の欄には，「教師や友だちと必要なやりとりをしながら，仕事に取り組んでいる」があり，この姿の「実現に必要な力」の一つとして，「言葉や支援ツールを使って思いを伝えることができる」を設定していた。学級担任は，Ｎ君の指導内容のとらえである「単語をつなげて詳しく答えること」や「写真やイラストを示しながら答えること」が，「言葉や支援ツールを使って思いを伝えることができる」ことにつながり，「教師や友だちと必要なやりとりをしながら，仕事に取り組んでいる」というＮ君の「３年後の願う姿②」に向かうものであることを確認することができた。そこで，Ｎ君が相手に自分の気持ちを伝える方法を増やしたり，伝える力を高めたりできるように，具体的に指導する内容「単語を組み合わせて伝えること」と「伝えたいことを写真やイラストで補うこと」を見出した。

個別の教育支援計画

群馬大学教育学部附属特別支援学校
作成日：平成23年3月31日

フェイスシート

ふりがな		性別	生年月日	ふりがな	
氏名	N	男	平成　年　月　日	保護者名	
住所				電話連絡先	
診断名	（診断医・診断機関		期日　平成　年　）		

支援シート

身体障害者手帳の有無	有（　　級）　・　無	療育手帳の有無　有（A1・2・3　B1・2）　・　無	
学部学年　担任	小学部1年	小学部2年	小学部3年
	小学部4年	小学部5年	小学部6年
	中学部1年	中学部2年	中学部3年
	高等部1年	高等部2年	高等部3年

現在・将来についての希望　（H23年3月現在）

本人	テレビを見たり外出したりして楽しく過ごしたい。
保護者	学校へ一人で登校する。 集団の中で一緒に行動できる。 いろいろな方に出会って，仕事を辛抱強くできて，お金を少しもらえて満足感が得られる仕事につく。

「3年後の願う姿」とその実現に向けた取組

3年後の願う姿① （基本的生活習慣について）	○おつかいを頼まれた物を店で選び，支払いをしている。
実現に必要な力 〈授業で取り扱った時期〉	・財布からお金を出して，支払いをすることができる。〈H22-前-②，H22-後-④，H23-前-④⑤〉 ・写真や見本と同じものを選ぶことができる。〈H23-前-②，H23-前-④〉 ・店員に商品の場所を尋ねることができる。〈H22-前-⑤，H22-後-④，H23-前-④〉
家庭及び外部連携	店での買い物やビデオレンタルショップでDVDのレンタルをする際，自分で支払いをする。（家庭で週2回）
成果と課題	H22年度　・生協で食べたい品物の写真を指さして伝えることができた。教師による促しが必要である。（学校） ・DVDを2本レンタルし，1000円札を出して支払いをすることができた。（家庭） H23年度 H24年度
3年後の願う姿② （就労について）	○教師や友だちと必要なやりとりをしながら，仕事に取り組んでいる。
実現に必要な力 〈授業で取り扱った時期〉	・自分から教師に支援を求めることができる。〈H22-前-③，H22-後-③〉 ・言葉や支援ツールを使って思いを伝えることができる。〈H22-前-③，H22-後-④〉 ・友だちとルールのあるスポーツや遊びを楽しむことができる。〈H22-前-③，H22-後③〉
家庭及び外部連携	サッカーなどのスポーツをしたり，ハイキングに出かけたりして，友だちや支援者と一緒に活動を楽しむ。（○○○○で月1回） 和太鼓や水泳など友だちと一緒に活動を楽しむ。（○○○で週5回）
成果と課題	H22年度　・後輩を授業に誘ったり，協力して荷物を運んだりすることができた。（学校） ・ベルを鳴らして支援者を呼び，検品の依頼をすることができつつある。（学校） ・プールでの活動に友だちの名前を呼んで誘うことができた。（○○○） H23年度 H24年度
3年後の願う姿③ （余暇・地域生活について）	○学校や普段利用している施設まで，一人で通っている。
実現に必要な力 〈授業で取り扱った時期〉	・交通安全に気をつけて行動することができる。〈H22-前-③，H22-後-③〉 ・1km程度の道のりを休まずに歩くことができる。〈H22-前-①，H22-後-①〉 ・行ったことのある場所まで，一人で歩いていくことができる。〈H22-前-③，H22-後-③〉
家庭及び外部連携	○支援員と約2kmの道のりを歩いて施設に向かう。（○○○で週5回）
成果と課題	H22年度　・校外学習では，列の先頭に立ち，交差点で信号や左右の安全を確認することができた。（学校） ・母親が見守る形で徒歩での登校をさせたいが，大きな交差点の横断を心配している。（家庭） H23年度 H24年度
策定日　平成23年4月○日〔新規・更新（　1　）回〕	
上記の内容及びその活用について，同意します。　平成23年○月○日　本人の署名（代筆可）　　　　保護者署名	

図８　Ｎ君の個別の教育支援計画

③共通テーマの設定

今回の授業では，Ｎ君を含めた本学習集団６名の生徒の具体的に指導する内容や学習履歴から，以下のように学習活動を設定した。

これまで，生徒は，教師や友だちとのかかわりの中で相手とやりとりする力を付けたり，工程表を見て作業内容や作業の順番に見通しを持って取り組む力を付けたりしている。そこで，他者とのやりとりや作業への取り組み方という視点で，それぞれの生徒の学習履歴を確かめた。すると，作品を作ったり，調理したりする活動の中で教師や友だちとやりとりする場面を設定した授業は，生徒にとって馴染みがあることが確認できた。作品づくりや調理は，写真やイラストを使った手順表やレシピを用意することで，「次にどんな材料が必要なのか」や「あの道具が足りない」と生徒が活動に見通しを持って取り組むことができる。また，作品づくりや調理といった馴染みのある活動ならば，自分の作品を友だちに見てほしいと感じたり，友だちの料理を味見をして「塩を入れるといいよ」と助言したりするといった他者とかかわることが自然にできると考えた。

このようなことから，作品づくりや調理をしながら，教師や友だちとやりとりするという学習活動を設定することにした。学習活動を設定する際，授業者は，生徒が友だちと行く沖縄への修学旅行に大きな期待感を持っており，生徒の興味・関心が高い修学旅行を題材にして，生徒に馴染みのある作品づくりや調理を取り入れた修学旅行の事前学習を行うことで，例えば，「単語を組み合わせて伝えること」と「伝えたいことを写真やイラストで補うこと」といったＮ君の具体的に指導する内容をはじめ，他の生徒の具体的に指導する内容を取り扱えるのではないかと考えた。

以上のことから，共通テーマ「沖縄に行こう」を設定した。

④共通テーマにおける目標の設定

授業者は，共通テーマ「沖縄に行こう」におけるＮ君の目標を設定するにあたって，Ｎ君の個別の教育支援計画（**図８，p.27**）の「３年後の願う姿②」と「実現に必要な力」を参照した。そこには，「教師や友だちと必要なやりとりをしながら，仕事に取り組んでいる」というＮ君の「３年後の願う姿」があり，その姿に向けて，「言葉や支援ツールを使って思いを伝える」力を高める必要があることを確かめることができた。そして，授業者は，Ｎ君が３語文で支援者や友だちに用件を伝えたり，言葉にすることが難しい事柄を写真やイラストで補いながら伝えたりするといった具体的な姿につながるような共通テーマにおける目標を設定することが必要だと考えた。そこで，沖縄に関係する作品づくりや調理をしながら，教師や友だちとやりとりすることを中心にした学習とＮ君の具体的に指導する内容から，共通テーマ「沖縄に行こう」におけるＮ君の目標を「単語を組み合わせたり，相手に絵や写真を示したりしながら，作品や料理を作った感想を伝える」こととした。

⑤共通テーマ「沖縄に行こう」の指導計画

授業者は，共通テーマにおける目標を設定した後，共通テーマ「沖縄に行こう」における指導計画を立てた。本共通テーマ「沖縄に行こう」では，エイサー体験で着るＴシャツや沖縄料理を作ったり，その感想を伝え合ったりする学習活動を設定することで，指導内容を取り扱い，Ｎ君の目標を達成できると考えた。

共通テーマ「沖縄に行こう」の各段階のテーマと主な学習活動を**表７**のように設定した。

表７　「共通テーマ『沖縄に行こう』における指導計画」

段　階	導入	展開	まとめ
「テーマ」	「沖縄はどんな場所か，調べよう」	「沖縄で着る服を作ろう」 「沖縄料理を作ろう」	「沖縄でやりたいことを決めよう」
回　数	２回	５回	２回
●主な学習活動	●雑誌やインターネットなどを使って沖縄について調べ，写真や地図，イラストを使って，自分用の旅行のしおりを作る。	●沖縄で着るＴシャツや土産を入れる手提げ袋のデザインを考えて，作る。 ●料理に必要な材料のメモを見ながら買い物をしたり，レシピを見ながら友だちと協力して調理したりする。	●沖縄について調べたことや取り組んできた学習の中から，沖縄で，友だちと一緒にどんなことを体験したいのかを決める。

「沖縄はどんな場所か，調べよう」
沖縄料理の写真を指さすＮ君

「沖縄で着る服を作ろう」
アイロンプリントをするＮ君

「沖縄でやりたいことを決めよう」
体験したい活動を選ぶＮ君

⑥学習履歴を参考にした支援の方法の設定

授業者は，Ｎ君の学習履歴を活用して，Ｎ君への支援の方法を設定した。支援の方法として，「教師が手本を示すこと」や「教師が手を添えて，手や指の動かし方を伝えること」，「写真やイラストを使って説明すること」，「友だちの姿が見渡せるように座席を配置すること」などによって，Ｎ君が活動に見通しを持って取り組めることを確認することができた。そこで，授業者は**表８**のようにＮ君への支援の方法を考えた。

表８　「Ｎ君への支援の方法」

	学習履歴	学習履歴から考えたこと	Ｎ君への支援
教師のかかわり方	○Ｎ君が朝の会で今日の目標を発表する際，どのように発表したらよいか迷っているときには，教師が，「○○（活動名），がんばります」と２語文で発表する手本を示した。 ○本人にとって馴染みのない道具を使う際には，教師が本人の手や指の動かし方を伝えたり，教師が道具の使い方の手本を示したりした。	○教師が手本を示すことで，Ｎ君は，初めての活動に見通しを持つことができるであろう。 ○この授業では，アイロンやなべといった本人にとって馴染みのない道具を使う際には，教師が道具の扱い方や体の動かし方などを手を添えて伝える必要があるであろう。	○Ｔシャツ作りにおいて，アイロンがけといったＮ君が初めて取り組む工程では，Ｎ君の手や指に，教師が手を添えて道具の動かし方を伝えたり，道具の使い方の手本を示したりする。
教具	○校外学習の事前学習では，どこで何をするのかをＮ君が見通しを持てるように，教師が場所や活動について，イラストや写真を使って示した。 ○就業体験では，Ｎ君は，実物の資材や道具の写真を示しながら,「(○○を)ください」と教師に用件を伝えた。	○写真やイラストを用いた視覚的な支援を行うことで，Ｔシャツ作りや調理の手順に対して，Ｎ君が見通しを持てるようになるであろう。	○Ｔシャツ作りでは写真やイラストを使った手順表を用意したり，調理では写真の並びで調理の手順や必要な道具を示した写真で示したレシピを用意したりする。
環境構成	○Ｎ君が朝の会で目標を発表する際，他の友だちが発表する姿を参考にできるように発表順を最後にした。	○教師や友だちが作品づくりや調理に取り組む姿を常に見られる座席配置にすることで，活動に対して本人が見通しを持ちやすくなるであろう。	○生徒の座席をＵ字型に配置したり，活動ごとに周囲に手順表を掲示して，手順や必要な材料・道具を確かめたりできるようにする。

（２）授業の実際

①「３年後の願う姿」につなぐことを視点にした授業

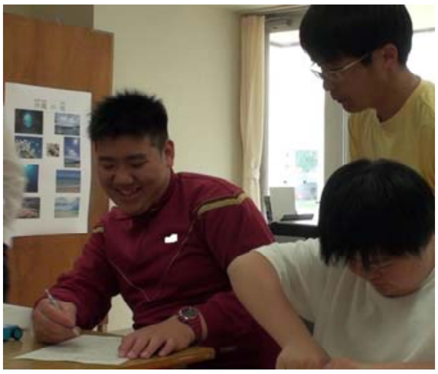
「沖縄に行こう」（５月17日　全９回中の５回目）

Ｎ君の本時の目標
「Ｔシャツの絵柄や色づかいに関する教師の質問に，言葉や指さしで答えることができる」

授業におけるＮ君の姿

教師の質問に対して，単語で答えたり，身振りを示したりして答える姿が50分間に10回見られ，その中で，言葉と身振りを組み合わせて，質問に答える姿が６回見られた。

言葉と身振りを組み合わせて，質問に答えるという６回の姿の中には，教師が見本のＴシャツを提示しながら「どんなＴシャツを作りたいですか」と尋ねると，自分で描いた下絵を指さしながら，「スティッチです」とキャラクターの名前を答える姿が見られた。こういった姿は，Ｎ君の「３年後の願う姿」に向かっている姿であるととらえることができた。



教師に自分の描いた絵を示すＮ君

しかし，教師が見本のＴシャツについて感想を尋ねた際には，「スティッチです」と質問の内容に合わない返答をしてしまったことがあった。また，教師が本人や友だちがデザインしたＴシャツを提示しながら「だれのデザインしたＴシャツを着てみたいですか」と尋ねると，自分の作ったＴシャツを指さしながら「小さいです」と質問に対する返答の言葉を省いてしまって，教師や友だちにＮ君の考えが伝わらない姿が４回程見られた。

Ｎ君に関する成果と課題

成果として，教師が質問の内容にかかわる具体物をＮ君に提示しながら，質問することで，指さしやうなずき，首を振ることといった身振りと言葉を組み合わせて，答える姿が見られた。

課題として，相手に伝えるべき言葉や示すべき身振りを省いてしまい，相手に自分の用件が伝わらない姿が見られた。授業後に，映像記録を確認したところ，教師の「どれを，着てみたいですか」という質問に対して，Ｎ君は「自分がデザインしたＴシャツを着たいです」，「でも，小さくて着られません」という思いを持っていたのではないかと思われたが，「小さいです」とだけ答えるだけに留まっていた。

次時の改善方法

○質問の内容を端的にして，Ｎ君に伝えること。
○Ｎ君が伝えたいことを引き出せるような質問をすること。

「沖縄に行こう」（５月19日　全９回中の６回目）

Ｎ君の本時の目標
「Ｔシャツの絵柄や色づかいに関する教師の質問に，言葉や指さしを組み合わせて答えることができる」

授業におけるＮ君の姿

教師の質問に対して，言葉や身振りで答える姿が50分間に14回見られた。そのうち，言葉と身振りを組み合わせて，質問に答える姿が１回見られた。教師がＮ君のデザインしたＴシャツを提示しながら，「どこをがんばって作りましたか」と尋ねると，自分でデザインしたＴシャツの絵柄を指さす姿が見られた。そして，教師が「何を描いたのですか」と尋ねると，「『いたの（人の名前)』です」と自分が描いたものが何なのかを答えることができた。そこで，教師が「『いたの』さんをがんばって描いたのですね」と言葉をかけると，「『いたの』さん，がんばりました」と言葉を組み合わせて答えることができた。

気に入ったＴシャツを教師に示すＮ君

Ｎ君に関する成果と課題

成果として，Ｎ君の言動や身振りから何を伝えたいのかを教師がとらえて端的に質問することで，Ｎ君が自分の気持ちを言葉と身振りを組み合わせて伝える姿が見られた。また，教師の質問に対して，言葉と身振りを使って答えようとする姿が前時よりも多く見られ，質問の内容に合った返答をする頻度も多くなった。

課題として，質問の内容に合った返答をする頻度は増えたが，感想や理由を尋ねるといった質問に対しては，質問の内容に合わない返答をしてしまったり，黙ってしまったりする姿も見られた。

②授業で高めた力を発揮する姿

N君が「言葉や支援ツールを使って思いを伝える」力を高めることができ，校外学習では，次のような姿が見られた。

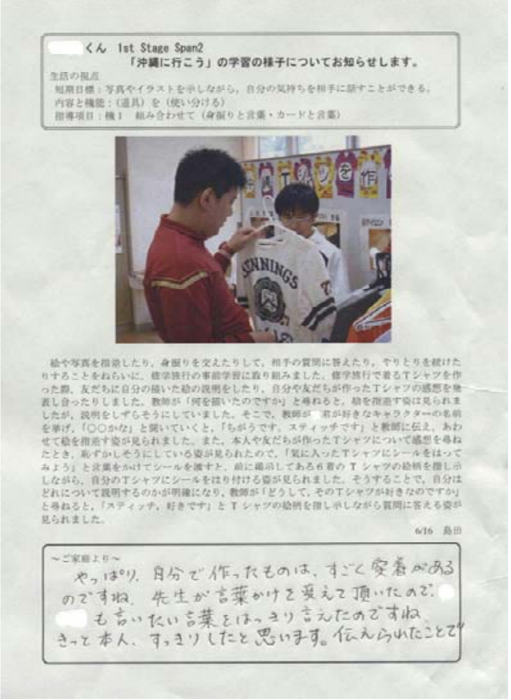
お店の人に写真を示しながら伝えるN君

修学旅行の事前学習において，沖縄そばを作るための材料を買いに行ったときのことである。N君は，店内で材料を探したが見つからず，店員に材料の場所を聞こうか迷っている姿が見られた。そこで，教師は，しおりにある沖縄そばに必要な材料が載っているページを指さしながら，「お店の人にめんの売り場を聞いてみましょう」と言葉をかけた。すると，しおりを使って，店員に尋ねるとよいことがわかり，しおりにある沖縄そばのめんの写真を指さしながら，「めん，ください」と伝えることができた。

（３）子どもへの今後の支援に関する保護者との連携

①「日々の学習の記録」を使った保護者とのやりとり

本校では，授業者が，授業における子どもへの指導のねらいや支援の方法，授業で見られた生徒の成果や課題などを記述した「日々の学習の記録」を作成し，授業の記録として保存している。また，家庭に配付し，授業における生徒の姿を学校から保護者に伝えたり，家庭や地域における生徒の関連する姿を家庭から学校に伝えたりしてもらうようにしている。これは，生徒の成長や現在の課題を学校と家庭とで理解の共通化を図ることを目的にしている。


くん　1st Stage Span2

「沖縄に行こう」の学習の様子についてお知らせします。

生活の視点

短期目標：写真やイラストを示しながら，自分の気持ちを相手に話すことができる。

内容と機能：（道具）を（使い分ける）

指導項目：機1　組み合わせて（身振りと言葉・カードと言葉）

絵や写真を指差したり，身振りを交えたりして，相手の質問に答えたり，やりとりを続けたりすることをねらいに，修学旅行の事前学習に取り組みました。修学旅行で着るTシャツを作った際，友だちに自分の描いた絵の説明をしたり，自分や友だちが作ったTシャツの感想を発表し合ったりしました。教師が「何を描いたのですか」と尋ねると，絵を指差す姿は見られましたが，説明をしずらそうにしていました。そこで，教師が　君が好きなキャラクターの名前を挙げ，「〇〇かな」と聞いていくと，「ちがうです。スティッチです」と教師に伝え，あわせて絵を指差す姿が見られました。また，本人や友だちが作ったTシャツについて感想を尋ねたとき，恥ずかしそうにしている姿が見られたので，「気に入ったTシャツにシールをはってみよう」と言葉をかけてシールを渡すと，前に掲示してある6着のTシャツの絵柄を指し示しながら，自分のTシャツにシールをはり付ける姿が見られました。そうすることで，自分はどれについて説明するのかが明確になり，教師が「どうして，そのTシャツが好きなのですか」と尋ねると，「スティッチ，好きです」とTシャツの絵柄を指し示しながら質問に答える姿が見られました。

6/16　島田

～ご家庭より～

やっぱり，自分で作ったものは，すごく愛着があるのですね。先生が言葉かけを変えて頂いたので，　も言いたい言葉をはっきり言えたのですね。きっと本人，すっきりしたと思います。伝えられたことで

「沖縄に行こう」のN君の「日々の学習の記録」

共通テーマ「沖縄で行こう」においても「日々の学習の記録」を作成し，N君が学習に取り組む姿や成長した姿，授業者が行った支援などについて，家庭に伝えた。保護者から「自分の言いたいことをはっきりと言えて，本人はすっきりとしたと思います」というコメントが書かれて，返却された。学級担任は，こういった保護者の記述から，N君にとって，自分の用件を相手に伝えることが家庭でも課題であることをうかがうことができ，N君が自分の用件を相手に伝える力を学校や家庭が連携して，今後も高めていく必要性を確認することができた。

学級担任は，「日々の学習の記録」をとおした家庭とのやりとりで得た情報を蓄積し，個別の教育支援計画に反映させる。そして，生徒やその保護者との面談において，個別の教育支援計画を活用して，今後の支援を検討する。

②面談における今後の支援についての検討

夏季休業前に実施している面談の際には，Ｎ君への今後の支援について，保護者と学級担任で次のように検討した。

まず，個別の教育支援計画の「３年後の願う姿」の中の一つである「教師や友だちと必要なやりとりをしながら，仕事に取り組んでいる」ことにかかるＮ君の様子について話題にした。自分の知っている言葉を組み合わせたり，写真やイラストを示して言葉を補ったりするといった「言葉や支援ツールを使って思いを伝える」力が高まってきたことを日々の学習の記録や校外学習におけるＮ君の姿を例に挙げながら，保護者に伝えた。保護者からは，買い物をするとき，店員の問いかけに「はい」や「いいえ」で答えたり，身振りで答えたりする姿が見られるようになってきたという報告があった。こうして，Ｎ君の「言葉や支援ツールを使って思いを伝える」力が高まってきたことや，高めた力を生活の中で生かす姿が家庭や地域でも徐々に見られてきたことについて，学級担任と保護者が理解の共通化を図ることができた。

次に，Ｎ君が「言葉や支援ツールを使って思いを伝える」力をさらに高めていくために，学校と家庭でどのようなことができるのかを話し合った。学級担任は，授業や行事において，Ｎ君が教師や友だちとやりとりする学習活動を設定し，「言葉や支援ツールを使って思いを伝える」力を高め，その力を発揮するＮ君の姿を日々の学習の記録や面談をとおして，保護者に伝えていくことを確認した。保護者は，Ｎ君が家庭や地域で「言葉や支援ツールを使って思いを伝える」力を発揮できるように，Ｎ君が保護者と一緒に行っている買い物や散髪などを，今後，徐々に一人で行けるようにしていくことを提案した。

そして，面談で学級担任と保護者が確認したり，検討したりしたＮ君の今後の支援については，学級担任が個別の教育支援計画における「家庭及び外部連携」や「成果と課題」の欄に反映させた（**図９，p.35**）。

個別の教育支援計画

群馬大学教育学部附属特別支援学校
作成日：平成23年3月31日

フェイスシート					
ふりがな		性別	生年月日	ふりがな	
氏名	N	男	平成　年　月　日	保護者名	
住所				電話連絡先	
診断名	（診断医・診断機関		期日　平成　年　）		

支援シート			
身体障害者手帳の有無	有（　級）・無	療育手帳の有無	有（A1・2・3　B1・2）・無
学部学年　担任	小学部1年	小学部2年	小学部3年
	小学部4年	小学部5年	小学部6年
	中学部1年	中学部2年	中学部3年
	高等部1年	高等部2年	高等部3年

現在・将来についての希望（H23年3月現在）	
本人	テレビを見たり外出したりして楽しく過ごしたい。
保護者	学校へ一人で登校する。 集団の中で一緒に行動できる。 いろいろな方に出会って，仕事を辛抱強くできて，お金を少しもらえて満足感が得られる仕事につく。

「3年後の願う姿」とその実現に向けた取組	
3年後の願う姿① （基本的生活習慣について）	○おつかいを頼まれた物を店で選び，支払いをしている。
実現に必要な力 〈授業で取り扱った時期〉	・財布からお金を出して，支払いをすることができる。〈H22-前-②，H22-後-④，H23-前-④⑤〉 ・写真や見本と同じものを選ぶことができる。〈H23-前-②，H23-前-④〉 ・店員に商品の場所を尋ねることができる。〈H22-前-⑤，H22-後-④，H23-前-④〉
家庭及び外部連携	店での買い物やビデオレンタルショップでDVDのレンタルをする際，自分で支払いをする。（家庭で週2回） 床屋に行って散髪をしてもらった後，自分一人で支払いをする。（家庭で月1回）
成果と課題	H22年度　・生協で食べたい品物の写真を指さして伝えることができた。教師による促しが必要である。（学校） ・DVDを2本レンタルし，1000円札を出して支払いをすることができた。（家庭） H23年度　・校外学習では，商品の写真を示しながら商品の場所を店員に尋ねたり，自分で支払ったりすることができた。（学校） H24年度
3年後の願う姿② （就労について）	○教師や友だちと必要なやりとりをしながら，仕事に取り組んでいる。
実現に必要な力 〈授業で取り扱った時期〉	・自分から教師に支援を求めることができる。〈H22-前-③，H22-後-③，H23-前-③〉 ・言葉や支援ツールを使って思いを伝えることができる。〈H22-前-③，H22-後-④〉 ・友だちとルールのあるスポーツや遊びを楽しむことができる。〈H22-前-③，H22-後③，H23-前-④〉
家庭及び外部連携	サッカーなどのスポーツをしたり，ハイキングに出かけたりして，友だちや支援者と一緒に活動を楽しむ。（○○○○で月1回） 和太鼓や水泳など友だちと一緒に活動を楽しむ。（○○○で週5回） 床屋で，散髪の依頼をする。（家庭で月1回）
成果と課題	H22年度　・後輩を授業に誘ったり，協力して荷物を運んだりすることができた。（学校） ・ベルを鳴らして支援者を呼び，検品の依頼をすることができつつある。（学校） ・プールでの活動に友だちの名前を呼んで誘うことができた。（○○○） H23年度　・友だちとボウリングゲームをした際，順番表を見ながら，友だちにボールを転がす順番を伝えることができた。（学校） ・Tシャツ作りでは，教師の質問に対して，絵を指さしながら，絵のキャラクターの名前を答えていた。（学校） H24年度
3年後の願う姿③ （余暇・地域生活について）	○学校や普段利用している施設まで，一人で通っている。
実現に必要な力 〈授業で取り扱った時期〉	・交通安全に気をつけて行動することができる。〈H22-前-③，H22-後-③，H23-前-②〉 ・1km程度の道のりを休まずに歩くことができる。〈H22-前-①，H22-後-①〉 ・行ったことのある場所まで，一人で歩いていくことができる。〈H22-前-③，H22-後-③〉
家庭及び外部連携	支援員と約2kmの道のりを歩いて施設に向かう。（○○○で週5回） 近くの床屋に一人で行って，帰ってくる。（家庭で月1回）
成果と課題	H22年度　・校外学習では，列の先頭に立ち，交差点で信号や左右の安全を確認することができた。（学校） ・母親が見守る形で徒歩での登校をさせたいが，大きな交差点の横断を心配している。（家庭） H23年度 H24年度
策定日　平成23年4月○日〔新規・更新（2）回〕	
上記の内容及びその活用について，同意します。　平成23年○月○日　本人の署名（代筆可）　　保護者署名	

図9　更新したN君の個別の教育支援計画

（４）まとめ

今回の実践では，個別の教育支援計画の「３年後の願う姿」につながる内容であるかどうかを確認して，子どもの具体的に指導する内容を見出した。また，授業後，今回の授業で見られた子どもの姿が「３年後の願う姿」にどのようにつながるのか確認し，その姿を個別の教育支援計画に記録した。そして，更新した個別の教育支援計画をもとに，本人や保護者と今後の支援について話し合った。

授業づくりの際に，学級担任は，個別の教育支援計画を参照することで，子どもの「３年後の願う姿」と「実現に必要な力」を見通して，子どもの具体的に指導する内容を見出すことができた。このようにして，学級担任が見出した子どもの具体的に指導する内容から，授業者は，学習活動や共通テーマにおける子どもの目標，指導計画などを設定することができた。

今回行った，個別の教育支援計画を参照した支援の在り方をまとめると，**表９**のとおりである。

表９　「個別の教育支援計画を参照した支援の在り方」

①学級担任は，子どもの学習履歴と実態から，指導内容をとらえる。そして，個別の教育支援計画の子どもの「３年後の願う姿」へ向かうように，具体的に指導する内容を見出す。 ②授業者は，子どもの具体的に指導する内容と学習活動から，共通テーマにおける目標を設定する。その際，個別の教育支援計画の子どもの「３年後の願う姿」に向かうようにする。 ③授業者は，生徒の姿が，共通テーマにおける目標をとおして，「３年後の願う姿」に向かっているかどうか，確かめる。必要ならば目標を再設定し，それに応じて支援の方法を見直す。

学級担任は，授業で見られた子どもの成果や課題を個別の教育支援計画に記録したり，それを基に今後の支援を子ども本人や保護者と一緒に検討したりすることで，「３年後の願う姿」に向かって継続した支援を学校や家庭と連携して行うことができた。今後も，「日々の学習の記録」でのやりとりや面談などをとおして，学級担任と保護者とで子どもの現在の姿を一緒に確認し，学校と家庭が連携した支援を続けていくことが大切である。今後の課題としては，福祉施設や病院，サークルなどといった地域との連携を強化していくことが必要である。

（文責：島田）

３　卒業後の生活につなぐ授業実践
－共通テーマ「これって…アリ？　ナシ？」（高等部）を例に－

高等部では，共通テーマ「これって…アリ？　ナシ？」(指導期間：６月27日～７月20日，全５回）の実践をとおして明らかにした，「子どもの将来を見通して，大切にしたい20のこと」（以下「20のこと」）を活用した，卒業後の生活につなぐ授業とその改善について，記述する。

（１）目標や支援を見直して，卒業後の生活につなぐ授業にする

本授業は，高等部の時間帯における，火，木，10:00～11:50の時間帯に相当し，「自立した生活をするために必要な力を高めること，進路決定に対する主体性を形成することを重視した時間」を指導時間帯のねらいとしている。

①実態と学習履歴とのつながりをとらえる

本学習集団の中で，取り扱う指導内容が「言葉の使い方」である高等部２年生Ｉ君を研究対象生徒とした。指導内容「言葉の使い方」にかかるＩ君の学習履歴は**表10**のとおりである。

表10　「『言葉の使い方』にかかるＩ君の学習履歴」

「共通テーマ」 （実施の年度/前後期）	Ｉ君が学習に取り組む様子
「キャンドル作り2010」 （平成22年度/前期）	教師の「どんな作業をしましたか」という質問を聞いて，自分から手を挙げた。その後，友だちの前でなかなか話し出せない姿が見られたが，「ろうを溶かしました」と２語文で発表することができた。
「農園芸」 （平成21年度/前期）	恥ずかしそうに友だちの前に出てくる姿が見られた。教師が「何をがんばりましたか」と尋ねると，「草むしり」と単語で答えることができた。
「第１回就業体験」 （平成21年度/前期）	支援者が代わる際に，次の支援者の名前を伝えると，「□□さん，針をください」と決まった言葉で報告することができた。

学習履歴から，平成21年度前期（中学部３年生）の時は，決まった言葉で話していたが，学習を積み重ねることで，自分の言葉で感想などを発表することができるようになってきていることがわかった。さらに，発表をする際に，友だちの前に出てくることはできるが，話し始めるきっかけを自分で作ることが難しいということもわかった。

次に，Ｉ君の実態に目を向けた。昨年度までは，休み時間に教師とかかわるときに，「携帯変えた」，「服新しい」というように，同じ質問を繰り返すことが多かった。今年度に入り，「昨日犬の散歩した」，「今日キャンドル作る」というように，経験を教師に詳しく話すことが多くなってきている。また，以前は，突然後ろから肩をたたくなど一方的なかかわりが多かったが，最近は「□□さん，一緒に鬼ごっこしよう」と友だちを呼んだり，相手に同意を求めたりできるようになってきている。一方，６月に行った就業体験では「これ，やる」や「□□さん，いい」などと尋ねる言葉遣いについて，実習先の福祉施設の支援者から「言葉が足りなくて，伝わりにくい」という評価を受けている。

②卒業後の生活を見通して，具体的に指導する内容を見出す

ホームルーム担任は，生徒の学習履歴と実態から，今回の共通テーマで，生徒の指導内容について，どのような力を伸ばしていけばよいのかを考えた。Ｉ君の場合，学習したことを日常生活に生かして，自分が知っている単語を組み合わせて他者に話しかける様子が少しずつ見られるようになってきている。しかし，現場実習では言葉が足りなくて伝わらないことを課題として指摘された。そこで，指導内容「言葉の使い方」を「高める」という観点で取り扱おうと考え，指導内容「言葉の使い方」を「自分の気持ちや考えを，自分が知っている単語を組み合わせて，相手に正確に伝えること」ととらえた。

そして，ホームルーム担任は，考えた指導内容のとらえと取り扱う観点が個別の教育支援計画の「３年後の願う姿」につながるかを考えた。Ｉ君の個別の教育支援計画の「３年後の願う姿」に「公共交通機関を利用して，一人で登下校をしている」があり，「実現に必要な力」として「困ったときに助けを求めること」を設定している。今回指導することが，Ｉ君が知っている言葉を組み合わせて，困っている状況を誰かに伝えることにつながるのではないかと考えた。

また，Ｉ君にとっての「３年後の願う姿」が卒業後の姿であるということから，卒業後の生活にどのようにつながるのかを考えた。「20のこと」では，作業に取り組む場面では，「報告・連絡・相談をすること」が卒業後の生活で求められるとしている。もし，Ｉ君が現在の姿のまま卒業後の生活を迎えると，作業中に自分がするべきことがわからなくなってしまった時に，「これ，やる」と支援者に尋ねてしまうかもしれない。「これ，やる」ではなく，「次はこの作業をやりますか」というように，単語を組み合わせて尋ねることができるようになることがＩ君の卒業後の生活において必要になる，ということが確認できた。

「自分の気持ちや考えを，知っている単語を組み合わせて相手に正確に伝えること」を身に付けておくことが「３年後の願う姿」につながるとともに，Ｉ君の卒業後の生活につながることを確認できた。具体的に指導する内容「自分の気持ちや考えを，相手に正確に伝えること」を見出し，授業者に伝えた。

③共通テーマの設定

Ｉ君を含めた学習集団の生徒の具体的に指導する内容や学習履歴から，授業者は以下のように学習活動を設定した。

個々の生徒の具体的に指導する内容を整理すると「相手の意見を聞いて，自分の意見を述べること」や「自分の要求したいものを相手にわかるように伝えること」など，他者に自分の意見や気持ちを伝えることとなっている生徒が多い。また，生徒の学習履歴を見ると，これまで４～５人のグループでの活動に多く取り組んでおり，その中で自分の気持ちを相手に伝えたり，友だちの意見を聞いたりする学習を行っている。また，作業場面においては，それぞれの生徒が工程の一部の役割を担い，流れ作業で１つの製品を作ることをとおして，友だちと協力してよりよい製品を作っていこうという意識が芽生えてきていることがわかった。

以上のことから，「友だちと話し合い，お互いに自分の意見を交換し合う」という学習活動を設定することにした。学習集団の生徒は６月に現場実習を経験している。授業者は，ホームルーム担任からの話や日常の生徒の様子から，生徒なりに「現場実習先で見た先輩たちのように，卒業した後に，自分も仲間と毎日楽しく働きたい」という意識を持っていることを把握していた。そこで，卒業後に必要となる対人関係のスキルを題材にして，場面に合わせた振る舞い方について，グループで話し合って自分たちなりのルールを決める活動を行うこととした。また，話し合いだけでなく，自分たちが決めたルールに基づいてロールプレイを行ったり，お互いを評価し合ったりする活動を行うことで，実際に日常生活に生かすことができる学習になるのではないかと考えた。

このようなことから，共通テーマ「これって…アリ？　ナシ？」を設定した。

④共通テーマにおける目標の設定

Ｉ君の具体的に指導する内容「自分の気持ちや考えを，相手に正確に伝えること」や大人としての振る舞いを題材にしながら，友だちと話し合ったりロールプレイをしたりする学習活動から，共通テーマ「これって…アリ？　ナシ？」におけるＩ君の目標を「教師の質問や友だちの意見に賛否を示し，その理由を話す」と考えた。

ここで，授業者は，設定した共通テーマにおける目標が，卒業後の生活につながっているかについて，もう一度確認することにした。ホームルーム担任が具体的に指導する内容を見出す際に使った，「３年後に願う姿」と「20のこと」につながっていると確認できたため，共通テーマ「これって…アリ？　ナシ？」におけるＩ君の目標を「教師の質問や友だちの意見に賛否を示し，その理由を話す」が将来に向かっていると確認できた。

⑤共通テーマ「これって…アリ？　ナシ？」の指導計画

共通テーマにおける目標を設定した後，本学習集団の生徒の共通テーマにおける指導計画を立てる。本共通テーマ「これって…アリ？　ナシ？」では，多様な場面について話し合い活動やロールプレイをしたいと考え，１単位時間の授業の流れを「問題提起のＶＴＲを見る→ＶＴＲについて話し合い，ルールを考える→ルールに沿ってロールプレイをする」とし，子どもが現在抱えている課題について，「目上の人への話し方」や「発表の仕方」など４つの場面を考え，それについて考えていく学習活動を設定した。これにより，それぞれの指導内容を取り扱い，個々の生徒の目標を達成できると考えた。

共通テーマ「これって…アリ？　ナシ？」の各時間のテーマと主な学習活動を**表11**のように設定した。

表11　「共通テーマ『これって…アリ？　ナシ？』における指導計画」

	導入	展開		まとめ
テーマ	「教員室での振る舞い方を考えよう」	「発表の仕方を考えよう」	「家族への態度を考えよう」	「友だちへの態度を考えよう」
回数	2	1	1	1
●主な学習活動	●教員室への入り方や教師への話しかけ方，話すときの態度について，話し合ってルールを決める。	●発表する際の話し方や声の大きさ，姿勢，友だちの発表を聞く態度について，話し合ってルールを決める。	●家族への接し方，話し方などについて，話し合ってルールを決める。	●友だちとの距離感，友だちとトラブルになってしまった場合の対処方法について，話し合ってルールを決める。

⑥学習履歴と「20のこと」を参考にした支援の方法の設定

Ｉ君の学習履歴や現在の姿,「20のこと」を参考にして，Ｉ君への支援の方法を設定した。授業者は，学習履歴や実態から支援の方法として，「台詞カードを活用すること」や「手本となる生徒がいる小グループでの活動を設定すること」，「Ｉ君の意見や考えに対して教師が質問し，整理していくこと」によって，Ｉ君が主体的に活動できるととらえた。さらに，「20のこと」を参考にしながら卒業後の生活に結びつく支援になっているかどうかを確認し，**表12**のようにＩ君への支援の方法を考えた。

表12　「Ｉ君への支援の方法」

	参考にした学習履歴や現在の姿	Ｎ君への支援	「20のこと」
教師のかかわり方	○休み時間に教師に「朝ご飯食べた」と話した。教師が「何を食べましたか」と更に質問すると，「パンを食べた」と何を食べたか答えることができた。	○グループでの話し合いの場面では，教師が司会役や進行役となる。Ｉ君の発言をとらえ，「ＶＴＲのどの部分からそう思ったのですか」というように，Ｉ君の考えを深める質問をする。	○自分の気持ちや健康状態を把握し，他者に伝えること。
教具	○支援者が替わった際に，支援者の名前を伝えると，「□□さん，針をください」と決まった言葉で報告することができた。 ○就業体験報告会で，台詞カードを頼りにして発表することができた。	○ＶＴＲに対して，良いか悪いかを答える際に，「○×カード」を用意することで，Ｉ君の気持ちが友だちに伝わるようにする。 ○発表やロールプレイをする際には，名前などを変えるだけでよい穴埋め式の台詞カードを用意する。	○自分の気持ちや健康状態を把握し，他者に伝えること。 ○報告・連絡・相談をすること。
環境構成	○キャンドルづくりでは，隣にいる友だちが行う作業の様子を見て，手順を覚えた。分担を変更した後も，同じ手順で作業を行うことができた。	○話し合いのグループを小グループにし，手本となる友だちをＩ君のグループに配置する。 ○発表したりロールプレイをしたりする際には，順番を手本となる友だちの後にする。	○仲間と協力して作業をすること。 ○状況を判断して，安全に行動すること。

（２）授業の実際

「教員室での振る舞い方を考えよう①」（６月28日　５回中の１回目）

Ｉ君の本時の目標　「ＶＴＲを見て，自分の意見を友だちに話す」

授業の概要

問題提起のＶＴＲとして，「教員室に入るときにノックをしない」，「『失礼します』と言わないで入室する」，「友だちに接するように教師に話をする」というものを提示した。そして，出演者の態度についてどう考えるか，「○×カード」を使ってグループ内で発表した。態度がよくないと考える場合にはどうしたらよいかについて話し合い，教員室に入る時のルールを決めた。

教師が考えた支援

学習履歴から，Ｉ君は自分の意見を徐々に話すことができるようになってきている段階であるととらえている。第１回目の授業で緊張することも考えられるため，「○×カード」のような，意見を表出しやすい支援具を用意する。

授業におけるＩ君の姿

ＶＴＲを注視するＩ君（左）

ノックをしないで教員室に入る場面を見た際には，×のカードを挙げる姿が見られた。さらに，○のカードを挙げている友だちに「×だよ」と話す姿も見られた。そこで教師が「なぜ×だと思ったのですか」と質問すると，Ｉ君は黙ってしまった。

成果と次時の支援の方針

「○×カード」を挙げて意見を表すことはできたが，理由までは答えることができなかった。次時は，話し合いをする際に，友だちの意見を参考にしてより詳しく自分の意見を発表することができるように，順番を友だちの後にする。

「教員室での振る舞い方を考えよう②」（６月29日　５回中の２回目）

Ｉ君の本時の目標：「グループで決めたルールに従って，ロールプレイを行う」

授業の概要

前時に，グループで話し合って決めたルールを振り返り，教師役，生徒役，評価役に分かれて，ロールプレイを行った。一人の演技が終わるごとに，評価役の人が演技について「○×カード」を挙げて評価をし，その理由を生徒役に伝えるようにした。その後，グループの代表２名が実際に教員室に行き，教師と話した。その様子をＶＴＲに撮影し，全員で視聴した後，評価を行った。

教師が考えた支援

ロールプレイで生徒役を演じる際には，発表順を３番目にし，他の友だちの様子をよく見ることができるようにする。また，評価役を務める際には，教師がグループで決めたルールを提示しながら「『失礼します』は，言えていましたか」と質問をするようにし，Ｉ君が何について意見を言えばよいのか，わかるようにする。

授業におけるＩ君の姿

友だちの姿に○を挙げるＩ君

友だちの姿を見て，「よくできていました」と○のカードを挙げることができた。教師が，授業の最後に「○○君のどこが一番よかったですか」と尋ねると，「『失礼します』と言えていました」と答えることができた。また，自分がロールプレイを行う時には，大きな声で「失礼します」と言ってから，入室することができた。しかし，教師役の友だちに話す内容がわからなくなってしまった。

成果と次時の支援の方針

友だちの意見を参考にして「失礼します」と言うことができた。また教師の質問に答えることで，自分の意見を友だちに話すことができた。しかし，話す内容が複雑になったり，質問内容が複数にわたったりすると話し出せなくなってしまう様子が見られた。話すべきことがわかるように，台詞カードを用意する。

友だちの姿を評価する際に，「○×カード」を挙げる姿が見られたため，今後も「○×カード」を使って意見が友だちに伝わりやすくなるようにする。

「発表の仕方を考えよう」（７月５日　５回中の３回目）

Ｉ君の本時の目標：「名前を呼ばれたらすぐに前に行き，発表をする」

授業の概要

問題提起のＶＴＲとして，発表の際に「なかなか話し出さない」，「小さい声で話す」，「よくない姿勢で話す」というものを提示した。ＶＴＲについて意見を出し合い，発表をする際のルールをグループごとに決めた。授業の最後に自己紹介のロールプレイを行い，友だち同士で評価した。

教師が考えた支援

話し合いの際には，友だちの意見を参考にできるように，順番を後にした。また，自己紹介の際には「私の名前は○○です」のような穴埋め式の台詞カードを用意した。話す内容が決まったら，事前に教師と練習するようにした。

授業におけるＩ君の姿

発表中に考えてしまうＩ君

出演者がなかなか話し出さないＶＴＲを見て，話し合いでは，Ｉ君は最初に○のカードを挙げた。しかし，友だちの発表を聞いて，×のカードに替え，友だちの意見を参考にして「話してないです」と意見を言うことができた。また，発表の際には，すぐにみんなの前に出て，名前を言うことができた。その後，話す内容がわからなくなり，発表することができなくなってしまったため，教師が発表内容についてＩ君に質問し，Ｉ君は質問に答えることで発表することができた。

成果

発表の際には，名前を呼ばれるとすぐに席から立ち上がり，前に出てきて名前を言うことができた。しかし，台詞が長かったためか，発表が止まってしまった。

友だちの意見を参考に，「○×カード」を替えたり，なかなか話し出さない場面のＶＴＲについて「話してないです」と自分で発表したりすることができた。

（３）本実践の成果

共通テーマにおける目標「教師の質問や友だちの意見に賛否を示し，その理由を話す」に向かう姿として，以下のようなＩ君の姿が見られた。

・ノックをしないで入室する場面を見て，×のカードを挙げた。
・教師が，「○○君のどこが一番よかったですか」と尋ねると，「『失礼します』と言えていました」と答えることができた。
・友だちの発表を聞いて，×のカードに替えた。友だちの意見を参考にして「話してないです」と意見を言うことができた。

これらの姿から共通テーマにおける目標をおおむね達成できたのではないかと考える。学習履歴と実態を基に設定した共通テーマの目標が適切であったこと，支援の方法がＩ君の指導内容の獲得に向けて適切であったことが考えられる。

また，授業後の姿として，次のようなＩ君の姿が見られた。

・大学生との交流で書道パフォーマンスをした際には，大きな紙に筆で描いている友だちを見て，「□□さん，パンダの絵を描いたね」と自分から大学生に話しかけていた。
・家庭では，体の不調を訴えることができるようになってきた。「頭が痛い」と，家族に伝えることができた。

日常的にかかわりの少ない大学生に自分から話しかけ，自分が知っている単語を組み合わせて思いを伝えることができた。また，言葉を使って体の不調を家族に伝えようとすることができつつある。このように，学習したことを生活場面で少しずつ生かそうしている姿から，私たちが，Ｉ君の卒業後の生活につなぐ授業を行うことができたのではないかと考えている。

（４）まとめ

今回の授業実践では，個別の教育支援計画とともに「子どもの将来を見通して，大切にしたい20のこと」を活用していくことで，卒業後の生活につなぐ授業を目指した。これまでの授業づくりでは，卒業後の生活について，教師の知識や経験を基に考えることが中心であった。卒業生現状調査から明らかにした「20のこと」を視点として，指導内容をとらえたり，共通テーマにおける目標を見直したりすることで，卒業後の生活につなぐ授業をより具体化することができたのではないかと考える。

今後は，今年度の研究を生かし，調査研究や文献研究を継続して行い，「子どもの将来を見通して，大切にしたい20のこと」を更新していきたい。子どもたち一人一人の卒業後の生活につなぐ授業がより確かなものになるよう，授業づくりに外部の方の意見を取り入れていくことも行っていきたい。

（文責：小須田，松尾）

Ⅷ　研究のまとめ

本校では，自立や社会参加につながる授業の在り方を明らかにするために，日々の授業の改善やそれにかかる計画の書式の改訂を行っている。３年計画の２年次である今年度は，本研究における授業づくりの基本的な考え方をより確かなものにするために，小中高の各部で実践を進めてきた。

その結果，以下の成果と課題を得ることができた。

○子どもの現在の姿を理解するための情報の一つとして，学習履歴が有効である。

学習履歴から過去の学習の様子や指導内容の獲得状況を読み取ることで，指導内容を適切に取り扱ったり，過去に有効だった支援の方法を生かしたりすることができる。しかし，最も重要なのは子どもの現在の姿であり，子どもの成長や変容に合わせ，学習活動や支援の方法を改善していく必要がある。また，子どもの現在の姿について多面的に探ることにより，一人一人の子どもに合わせた，よりよい授業を構想することができそうである。

○個別の教育支援計画を活用することで，学校や家庭が，子どもの成長を長期的な視点で支援することができる。

本人や保護者の願いを基にした「３年後の願う姿」に向かうように授業の目標を設定したり，できるようになったことを個別の教育支援計画に記録して今後の支援を検討したりすることで，学校と家庭が理解を共通化し，継続した支援を行うことができそうである。さらに，個別の教育支援計画を基に，子どもにかかわる様々な人や機関の役割を明らかにすることで，一貫した指導を行うことができそうである。

○卒業生現状調査の結果を一つの視点として共通テーマの目標や支援を見直すことで，卒業後の生活を見通した授業をより確かなものにすることができる。

卒業後に求められることを明らかにしておくことで，日々の授業を改善したり，その子どもにとって身に付けておいた方がよいことを具体化したりしやすくなる。より活用できるようにするために，これまでの本校の研究の成果や先行研究，調査研究の結果などを参考に，「子どもの将来を見通して，大切にしたい20のこと」をより妥当性の高いものへと更新していく必要がある。

研究の最終年次である３年次は，残された課題を解決し，研究のまとめとして確立した授業づくりの基本的な考え方を生かして，より多くの実践を重ねていきたいと考える。

（文責：石井，島田，山田，松尾，小須田）

引用・参考文献

（五十音順）

○麻実ゆう子(2010),「教育実践とヴィゴツキー理論」，一光舎

○岩手県立総合教育センター特別支援教育室
(2006),「知的障害のある児童生徒が在籍する養護学校における
組織的，系統的なキャリア教育の在り方に関する研究（第１報）」
(2008),「特別支援学校（知的）キャリア教育推進ガイドブック 理解編」
「特別支援学校（知的）キャリア教育推進ガイドブック 実践・資料編」

○外務省(2009),「障害者の権利に関する条約（公定訳文案）」

○群馬県(2011),「第９次群馬県職業能力開発計画」

○群馬大学教育学部附属特別支援学校(2007-2010),「研究紀要 第28-31集」

○群馬大学教育学部附属養護学校(1980-2007),「研究紀要 第１-27集」
(1989),「研究紀要 第９集 別冊資料」
(1994),「研究紀要 第14集 別冊１」

○Ｊ.ピアジェ（波多野完治・滝沢武久訳）(1960),「知能の心理学」，みすず書房

○重度障害者の就労促進を目指す研究開発プロジェクト(2010),「私もはたらく」

○全国特殊学校長会
(2005),「よくわかる『個別の教育支援計画』Ｑ＆Ａ」，ジアース教育新社
(2006),「『個別の教育支援計画』策定・実施・評価の実際」，ジアース教育新社

○全国特別支援学校知的障害教育校長会(2010),
「特別支援教育のためのキャリア教育の手引き」，ジアース教育新社
「新しい教育課程と学習活動Ｑ＆Ａ」，東洋館出版社
「知的障害教育における学習評価の方法と実際」，ジアース教育新社

○総務省(2003),「障害者の就業等に関する政策評価書」

○独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構 障害者職業総合センター(1999),
「調査研究報告書No.34 知的障害者の就労の実現と継続に関する指導の課題」

○ヴィゴツキー（土井捷三・神谷栄司訳）(2003),
「『発達の最近接領域』の理論」，三学出版

○前橋市地域自立支援協議会(2010),「障害者の雇用に関するアンケート　調査報告書」

○茂木俊彦(1997),「障害児教育大事典」，旬報社

○文部科学省(2009),「特別支援学校 学習指導要領」
(2009),「特別支援学校学習指導要領解説 総則等編」
(2009),「特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編」

巻 末 資 料

「平成23年度　卒業生現状調査（事業所調査）」の概要と分析結果

Ⅰ　調査概要

１　目的

事業所や福祉施設（以下，事業所等）における本校卒業生の生活状況を調べ，在学中に学校として指導すべき内容や方法を見出すための資料を得ること。

２　対象

平成18年度以降５年間の本校卒業生の進路先20カ所に所属する卒業生30名のうち抽出した20名。

３　調査内容

進路先の事業所等がとらえる，卒業生の生活上のよさや課題について。（pp. 54-55，用紙１）

４　調査方法について

・調査用紙は，訪問前に各事業所等に送付し，調査内容について理解をいただいた。
・調査用紙を基に，面接，聞き取りを行った。

５　回答について

日頃の本校卒業生の様子を知り，支援を総括する立場の方（サービス管理責任者，主任等）に回答していただいた。

６　調査結果の整理・分析方法について

以下の手順で，結果の整理・分析を行った。
①各事業所等から聞き取った内容の文章を一覧化した。
②文章を単語や文節で区切り，それらの出現の頻出数を調べた。
③関連する単語を集めてカテゴライズした。
④関連するカテゴリを集めて文章化し，子どもの卒業後の生活の３つの場面「家庭で過ごす場面」，「地域で暮らす場面」，「職場で働く場面」を想定して，文章を分類した。
⑤過去の本校の授業実践や文献調査などから得たことを加味し，「子どもの将来を見通して，大切にしたい20のこと」としてまとめた。

Ⅱ　調査結果

１　「通勤に関すること」から得られたカテゴリ

①『状況を判断すること』
②『安全・きまり・ルールを守ること』
③『品物を選ぶこと』,『お金を遣うこと』
④『状況を相手に伝えること』

①「通勤」６,「送迎」３,「遅刻」３,「風雨」２,「変更」１などから，天候の変化や予定の変更など，状況に応じて行動することが読み取れ，**『状況を判断すること』**というカテゴリにまとめた。
②「時間」８,「安全」３,「ヘルメット」２,「蛇行」１,「守る」１などから，出勤時刻を守って通勤すること，交通ルールを守ること，安全に気を付けることが読み取れ，**『安全・きまり・ルールを守ること』**というカテゴリにまとめた。

③「購入」１,「おかし」１,「コンビニ」１などから，通勤途中に買い物をすることが読み取れ，**『品物を選ぶこと』,『お金を遣うこと』**というカテゴリにまとめた。

④「電話」３,「かける」２,「心配」２,「職場」１,「自宅」１などから，保護者や事業所の方に電話をすることが読み取れ，**『状況を相手に伝えること』**というカテゴリにまとめた。

２　「作業に取り組む場面に関すること」から得られたカテゴリ

⑤『作業や準備・片付けをすること』
⑥『安定したペースで作業を続けること』
⑦『目標に向けて主体的にチャレンジすること』
⑧『見通しをもって行動すること』
⑨『支援者の指示に応じること』
⑩『報告・連絡・相談をすること』
⑪『仲間とやりとりをすること』
⑫『健康状態を知ること』

⑤「ねじ」５,「袋詰め」３,「食器洗い」２,「組み立て」２,「片付け」２,「段取り」１などから，作業をすること，準備や片付けをすることが読み取れ，**『作業や準備・片付けをすること』**というカテゴリにまとめた。

⑥「続ける」８,「一定」３,「落ち着く」２,「黙々と」１などから，落ち着いて作業を続けることが読み取れ，**『安定したペースで続けること』**というカテゴリにまとめた。

⑦「質」２,「量」１,「意欲」１,「新しい」１,「チャレンジ」１などから，仕事に対する意欲をもつこと，向上心を持って仕事をすることが読み取れ，**『目標に向けて主体的にチャレンジすること』**というカテゴリにまとめた。

⑧「時間」４,「変更」２,「場所」２,「休憩」２,「終わる」１などから，時間に合わせて仕事に取り組むこと，時間や場所の変更に対応することなどが読み取れ，**『見通しをもって行動すること』**というカテゴリにまとめた。

⑨「指示」３,「スタッフ」３,「職場」２,「覚える」２,「仕上げる」２,「受け入れる」１,「改善」１などから，指示に沿って仕事をすること。指摘されたことを改善することが読み取れ，**『支援者の指示に応じること」**というカテゴリにまとめた。

⑩「言う」４,「依頼」１,「不良」１,「呼ぶ」１などから，出来たことや困ったことを支援者に話すことが読み取れ，**『報告・連絡・相談をすること』**というカテゴリまとめた。

⑪「自分」10,「周り」２,「仲間」２,「一緒」２,「挨拶」１,「答える」１などから，自分から他者にかかわりを持つことが読み取れ，**『仲間とやりとりをすること』**というカテゴリにまとめた。

⑫「体調」１,「心」１,「眠い」１,「話す」１,「知る」１などから，自分の体調の変化を知ることが読み取れ，**『健康状態を知ること』**というカテゴリにまとめた。

３　「休憩時間に関すること」から得られたカテゴリ

⑬『量を考えて食事をすること』
⑭『落ち着ける場所で休み時間を過ごすこと』
⑮『自分から他者とかかわること』

⑬「昼食」３,「多少」２,「食べる」１,「調節」１などから，自分で食べられる量を判断することが読み取れ，**『量を考えて食事をすること』**というカテゴリに分類した

⑭「休憩」４,「楽しみ」２,「居場所」１,「ゆったり」１などから，気持ちが落ち着く場所を見つけることが読み取れ，**『落ち着ける場所で休み時間を過ごすこと』**というカテゴリにまとめた。

⑮「自分」10,「他者」１,「欲しい」１,「言葉」１,「電話」１,「交わす」１などから，自分の思いを伝えることが読み取れ，**『自分から他者とかかわること』**というカテゴリにまとめた。

４　「余暇的な活動に関すること」から得られたカテゴリ

⑯『自分なりの楽しみを持つこと』,『趣味や特技を持つこと』,『視野を広げること』 ⑰『いろいろな人と一緒に行動すること』 ⑱『地域で過ごすこと』,『地域の資源を活用すること』

⑯「カラオケ」３,「のびのび」３,「挑戦」２,「楽しみ」２,「ボウリング」１,「記録」１,「ファッション」１,「知る」１,「広げる」１などから，自分で楽しめるものを見つけること，得意なことを見つけること，色々なものに興味を持つことが読み取れ,**『自分なりの楽しみを持つこと』,『趣味や特技を持つこと』,『視野を広げること』**というカテゴリにまとめた。

⑰「ボランティア」２,「一緒」２,「送迎」１,「〇〇の会」１などから，家族以外の人と行動することが読み取れ,**『いろいろな人と一緒に行動すること』**というカテゴリにまとめた。

⑱「参加」８,「旅行」４,「行く」３,「行事」３,「近く」２,「教室」１,「センター」１などから，近隣の施設や場所に出かけて過ごすことが読み取れ,**『地域で過ごすこと』,『地域の資源を活用すること』**というカテゴリにまとめた。

５　「食事の場面に関すること」から得られたカテゴリ

⑲『お金を遣うこと』 ⑳『気持ちをコントロールすること』 ㉑『自分の体調の変化に気付くこと』 ㉒『バランスを考えて食事や調理をすること』

⑲「買う」２,「注文」１,「コンビニ」１などから，商店を利用して買い物をすることが読み取れ,**『お金を遣うこと』**というカテゴリにまとめた。

⑳「欲しい」３,「抑える」１,「落ち着く」１などから，欲求を抑えることが読み取れ,**『気持ちをコントロールすること』**というカテゴリにまとめた。

㉑「体重」３,「増加」２,「減る」２,「管理」１などから，自分の体調の変化に気付くことが読み取れ,**『自分の体調の変化に気付くこと』**というカテゴリにまとめた。

㉒「弁当」３,「好き嫌い」１,「おかず」１,「作る」１などから，食事をとおして健康な体を作ることが読み取れ,**『バランスを考えながら食事や調理をすること』**というカテゴリにまとめた。

６　「それ以外の基本的な生活習慣に関すること」から得られたカテゴリ

㉓『身辺処理をすること』,『身だしなみを整えること』 ㉔『持ち物の整理整頓をすること』 ㉕『相手に伝えること』

㉓「排泄」４、「衣服」３,「歯磨き」２,「しっかり」１などから，基本的な生活習慣にかかることを身に付けることが読み取れ,**『身辺処理をすること』,『身だしなみを整えること』**というカテゴリにまとめた。

㉔「荷物」１,「かばん」１,「片付ける」１などから，持ち物の整理整頓を心がけることが読み取れ,**『持ち物の整理整頓をすること』**というカテゴリにまとめた。

㉕「言葉」４,「挨拶」１,「言葉遣い」１などから，自分なりの方法で相手に伝えることが読み取れ,**『相手に伝えること』**というカテゴリにまとめた。

Ⅲ　調査結果の考察

各調査項目で得られたカテゴリをそのまま生かしたり，各調査項目で関連しているカテゴリは一つに統合したりして文章化した。子どもの卒業後の生活を「家庭で過ごす場面」，「地域で暮らす場面」，「職場で働く場面」の３つの場面ととらえ，文章を振り分けた。平成22年度に実施した卒業生現状調査（事業所調査・本人調査）の結果を加味し，「子どもの将来を見通して，大切にしたい20のこと」をまとめた。

調査結果の○囲みの数字が以下の「20のこと」に対応している。

「子どもの将来を見通して，大切にしたい20のこと」

家庭で過ごす場面	○身辺の処理と健康管理を確実に行うこと。⑳ ○生活リズムを整えること。（平成22年度に実施した卒業生本人調査から） ○持ち物の管理や身の回りの整理をすること。㉔ ○自分の気持ちや健康状態を把握し，他者に伝えること。⑫⑳㉕ ○相手に好感を与える態度や身だしなみを心がけること。㉓ ○状況を判断して，安全に行動すること。①② ○バランスを考えながら食事をしたり，調理をしたりすること。⑬㉒ ○金銭の管理や支払いをすること。③⑲
地域で暮らす場面	○気持ちが落ち着く場所や自分なりの楽しみをもつこと。⑭ ○趣味・特技をもち，楽しみながら視野を広げること。⑯ ○いろいろな人と活動したり，いろいろなことに挑戦したりすること。⑮⑰ ○自分の住む地域に関心を持ち，関わりのある地域へ活動の場を広げること。⑱ ○物を大切にすること。（平成22年度に実施した卒業生本人調査から）
職場で働く場面	○一人で作業を進めること。⑤ ○仲間と協力して作業をすること。⑪ ○報告・連絡・相談をすること。④⑩ ○指示に合わせて取り組むこと。⑨ ○始まりや終わりが分かること。⑧ ○長時間，安定したペースで作業を続けること。⑥ ○自分なりの目標をもち，意欲的に作業に取り組むこと。⑦

用紙１

平成23年度卒業生現状調査　調査用紙

群馬大学教育学部附属特別支援学校

○○○○　　さんについて，訪問時にお聞きしたい内容

※本校卒業生　○○○○さんの現在の様子について，お聞きしたいことを挙げさせていただきました。
この用紙にご記入いただく必要はありません。
※本校職員が訪問させていただいた際，この内容に沿ってお話を聞かせていただきます。

Ⅰ　通勤に関して

1　どのような手段で通勤していますか。
2　①よくできている点，②解決した課題，③現在の課題は，具体的にはどのようなことですか。
・移動　・コミュニケーション　・安全　・社会のルール
・マナー（身なり，振る舞い，言葉遣い，人との距離など）　・その他
3　原因や背景をどのようにお考えですか。

Ⅱ　作業に取り組む場面に関して

1　どのような作業に取り組んでいますか。
2　①よくできている点，②解決した課題，③現在の課題は，具体的にはどのようなことですか。
・技術（専門性，資格，自立，仕事の量・質，情報伝達など）
・コミュニケーション（同僚，上司，お客様）
・マナー（身なり，振る舞い，言葉遣い，人との距離など）
・勤務態度（意欲，責任感，協調性，粘り強さ，心の安定）
・健康　・安全　・作業中のルール　・その他
3　原因や背景をどのようにお考えですか。

Ⅲ　休憩時間に関して

1　休憩時間には，どのようなことをして過ごしていますか。
2　①よくできている点，②解決した課題，③現在の課題は，具体的にはどのようなことですか。
・コミュニケーション（同僚，上司）
・マナー（身なり，振る舞い，言葉遣い，人との距離など）
・気分転換の方法　・休憩時間のルール　・健康　・安全　・その他
3　原因や背景をどのようにお考えですか。

Ⅳ　余暇的な活動に関して

1　外出，買い物，運動，音楽，美術，その他の学習など，生活を充実させるための活動をしていますか。活動をしている場合には，どのようなことをしていますか。
2　①よくできている点，②解決した課題，③現在の課題は，具体的にはどのようなことですか。
　・多様な経験　・探究心　・技術　・ルール　・マナー
　・コミュニケーション（仲間）　・楽しむこと　・その他
3　原因や背景をどのようにお考えですか。

Ⅴ　食事の場面に関して

1　食事をする場面で，①よくできている点，②解決した課題，③現在の課題は，具体的にはどのようなことですか。
　・マナー　・規則正しく食事をすること　・噛むことや飲み込むこと
　・好き嫌いをしないこと　・拒食や過食　・食事を楽しむこと
　・食事の準備や片付け　・その他
2　原因や背景をどのようにお考えですか。

Ⅵ　それ以外の基本的な生活習慣に関して

1　基本的な生活習慣について，①よくできている点，②解決した課題，③現在の課題は，具体的にはどのようなことですか。
　・排泄　・衣服の着脱，調節　・身だしなみを整えること
　・その場に合った服を選ぶこと　・食生活　・体の清潔
　・掃除や整理整頓　・調理をすること　・健康管理　・お金の管理
　・気持ちの表現　・依頼や訴えをすること
　・時と場所に応じた適切な言葉遣いや態度　・異性とのかかわり
　・携帯電話やパソコンの使用
　・その他
2　原因や背景をどのようにお考えですか。

Ⅶ　その他

1　○○○○　さんが自立や社会参加に向かうために大切なことは，どのようなことだとお考えですか。

2　知的に障害のある方が，自立や社会参加に向かうために大切なことは，どのようなことだとお考えですか。

あ と が き

「子どもから学ぶ」これは、私たち教師にとっては、基本的な心構えと考えられていることです。本校では、「子どもがあって学校がある」をモットーにしているので、さらに当然のことであります。しかし、「子どもから学んでいる『つもり』」になっていないかどうか、自問自答する必要があると思います。それは、子どもの成長があるからこそ、教師も学べるからです。

本研究をスタートさせる前、私たちは自分たちの教育の成果や課題について、様々な観点から見つめ直してみました。「ニーズ教育を精密に具体化したと自負している個別カリキュラムの編成・実施によって、本当に子どものニーズに応えてこられたのか？」、「小学部を卒業した児童は、６年間の学びでどう変容したのか？」、「中学部の生徒は？」、「高等部を卒業する生徒は、社会に参加し自立できるようになたったのか？」と、改めて問いました。

答えは、「ほぼできている」というものでした。残念ながら、成長がはっきり確認できないケースがあったからでした。本校の教員の多くが直感的に感じていた、「同じような内容を繰り返し指導してはいないだろうか」、「この内容がどう生徒の自立、社会参加につながるのだろう」という不安を払拭できない結果となりました。そこで、改めて本校の個別カリキュラムの精度を高めたいという研究課題を見出すこととなり、「子どもの過去と未来をつなぐ授業」の実践化の必要性を認識したのであります。

「子どもの過去と未来をつなぐ授業」の実践方法として、私たちは「学習履歴」と「個別の教育支援計画」に着目しました。「学習履歴」は、通知表や学習記録などに個別に記録されていた子ども一人一人の学習の様子を整理し、データベース化するという膨大で繊細な作業を行い、授業作りに活用できるようにしました。しかし、「学習履歴」は、まだまだ万全のものとはなっておりません。さらに、「学習履歴」や「個別の教育支援計画」が「過去と未来をつなぐ」ための授業作りにどう活用できるかも研究途上であります。本校の授業が児童生徒のニーズに応え、その子の自立・社会参加につながっているかを、本紀要や、公開研究会の授業を通して多くの方々に評価していただければと願っております。そして、私たちの実践が「豊かな生活を拓く」児童生徒の育成を実現し、その過程で私たちは「子どもから学び」、「子ども主体」の授業ができる教師として成長したいと思います。さらには、子どもの成長を保護者とともに喜べる教師にもなりたいと考えております。

なお、本校の研究を推進するにあたり、多くの方々からのご支援を頂戴いたしました。中原先生や海野学校アドバイザーさん、教材等作成支援チームの学生さん、そして何より、教育学部の障害児講座や研究協力の先生方には、私どもの研究活動に日々参画して頂きました。多くの方々のご理解・ご協力を頂きましたことに深く感謝申し上げます。

副校長　　倉林　正

研究に携わった者

平成23年度に研究に携わった職員

校長 松本富子　副校長 倉林 正　教務主任 三俣利明

城田謙司	樺澤美智代	井草昌之	瀧沢泰之	菅野 剛
小林敦子	山田由記子	前村亜矢子	定村 治	石井達也◎
松本 優	内田 誠	小須田稔〇	三澤哲彦	石川裕紀
島田 洋〇	高橋源太郎	山田雅之〇	長谷川剛広	城田英子
水落公美子	三浦直子	松尾英知〇	水野理恵	田村旭子
宇佐美多恵子	川島さやか	浅岡友美	岩崎和子	新井ひとみ
宮城真希	長田紗綾	森佑季子	神山 瞳	

◎研究主任　〇研究部員

平成23年度　研究協力者

久田信行（群馬大学）
浦﨑源次（群馬大学）
吉野浩之（群馬大学）
金澤貴之（群馬大学）
霜田浩信（群馬大学）
中村保和（群馬大学）
松田 直（高崎健康福祉大学）
是枝喜代治（東京福祉大学）
上田征三（東京未来大学）
茂木一司（群馬大学）
江森英世（群馬大学）
海野重幸（学校アドバイザー）
中原 泉（ワークハウス ドリーム）

平成22年度まで研究を共にした方

石原隆志（伊勢崎市立あずま南小学校）
前島 朗（高崎市立第一中学校）
井上聖則（群馬県立みやま養護学校）
新谷優太（玉村町立南小学校）
荻原美音（高崎市立南八幡小学校）

研究紀要　第32集

将来にわたって豊かな生活を拓く児童生徒の育成
－子どもの過去と未来をつなぐ授業実践－

発　行　日　　平成23年10月31日
編集責任者　　倉　林　　　正
発　行　者　　松　本　　富　子
発　行　所　　群馬大学教育学部附属特別支援学校
　　　　　　　前橋市若宮町二丁目８番１号
　　　　　　　TEL：027-231-1384
印　　　刷　　上武印刷株式会社
　　　　　　　TEL：027-352-7445